

復刊
第133号
(第50巻 第2号)

平成27年(2015年)10月15日発行



— 発行 全国高等学校演劇協議会 —

〒270-0025 千葉県松戸市中和倉590 千葉県立松戸高等学校 TEL(047)341-1288 FAX(047)346-4002

事務局長 阿部順 編集加藤悟

ホームページ <http://koenkyo.org/> メール info@koenkyo.org

第61回大会審査の経過

昨年度60年の節目を迎え、新たなステージに入った「全国高等学校演劇大会」は、7月30日（木）～8月1日（土）の日程で滋賀県ひこね市文化プラザを会場に行われました。

今回の大会は、専門審査員として、劇団リリパットアーミーⅡの座長を務めるとともに多くの作品の脚本、演出に携わり、幅広い活躍をされているわかぎゑふ先生、玉川大学芸術学部で教鞭をとられるとともに、NPOや地域、プロの劇団の作品の演出をされている太宰久夫先生、劇作家として数多くの作品を手掛け、演劇教育の分野でも多くの実績を上げている篠原久美子先生、そして舞台美術家として国内のみならず海外でも数多くの舞台美術を手がける島川とある先生の4名にお願いいたしました。顧問審査員は関東ブロックから野間哲先生、中国ブロックから片山稔彦先生、九州ブロックから久保田和弘先生と、いずれも今まで全国大会などでも多くの作品を発表されてきた3名の方にお願いいたしました。

今回も、1日目の上演が終了した段階で、まず初日の上演校について、審査の進め方や着眼点をふまえた審査の方向性をおさえました。その上で、2日目の上演終了後にそれまで上演された作品についての審査会、続けて3日目の全校の上演終了後、最終的な審査を行いました。

まず優秀校対象の4校を選出しました。この段階で、表通り、得票数の順に4校に絞られました。そして、この中から最優秀校と優秀校を選ぶ議論を進めました。

緑風冠「太鼓」は、戦争を扱った作品でしたが、今の時代だからこそこのような作品を真摯に上演しようとする姿勢、また脚本に誠実に向き合い、それを誠実に読み解いていくとする点が評価されました。

大分豊府「うさみくんのお姉ちゃん」は、演出が細部まで行き届いている点、ドラマをセオリー通りにやることの素晴らしさを感じさせ、安定感のある作品である点、そして何より生徒自身が作品と楽しく向き合っている点が高く評価されました。

札幌琴似工業定時制「北極星の見つけかた」は、リアルに生きている高校生の姿の描き方に強く共感することができる点、生徒たちの世界を作者がよく理解して仕上げている点、傷つきながら生きていることへの誠実さを強く感じができる点などが評価されました。

丸亀「用務員コンドウタケシ」は、よく訓練されており、身体性の高さが感じられる点、人物の書き分けがきちんとできている点、奇をてらわず観る側に訴えかけてくる感度の高い作品である点、そして何より演じる側が作品を楽しんでいる点などが評価されました。

初日から、丁寧に作品についての議論が重ねられてきました。作品の完成度のみならず生徒自身が作品とどう向き合っているか、どう楽しんでいるかという視点からの意見が出されました。そのため、得票数もさることながら、それぞれの作品の組み立て方、世界観の作り方、生徒の姿勢などを総合的に判断し、今回の結果となりました

創作脚本賞については、対象6校の中で票が分かれましたが、ドラマの構成の巧みさ、演技を支える本作のうまさが高く評価された大分豊府が、舞台美術賞についてはオーセンティックな美術であり、細部まできわめて完成度が高く作られていることから全員一致で札幌琴似工業定時制が、内木文英賞については高校生の姿を丁寧に描き生徒の熱心な練習の成果が感じられるとともに、会場の同世代の共感度が高い作品を仕上げている点などから神奈川大学附属がそれぞれ受賞しました。

創作、既成問わず、生徒自身が作品にきちんと向き合い、自分のものにしていくという「基本」が大切であることを考えさせられた大会でした。

(事務局：三上・杉内)

【最優秀賞(文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞)】

大分県立大分豊府高等学校

中原久典／作『うさみくんのお姉ちゃん』

【優秀賞(文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞)】

(上演順)

大阪府立緑風冠高等学校

木谷茂生／作『太鼓』

北海道札幌琴似工業高等学校 定時制

鷺頭 環／作『北極星の見つけかた』

香川県立丸亀高等学校

豊嶋了子と丸高演劇部／作『用務員コンドウタケシ』

【優良賞(全国高等学校演劇協議会会長賞)】(上演順)

佐賀県立佐賀東高等学校

いやどみ☆こ～せい・佐賀東高等学校演劇部／作『ママ』

千葉県立松戸高等学校

黒瀬貴之／作『CRANES』

鳥取県立米子高等学校

高泉淳子／作『学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品』

福島県立いわき総合高等学校

いわき総合高校演劇部／原案 斎藤夏菜子／構成・脚本

『ちいさなセカイ』

長野県松川高等学校

青山一也／作『べいべー』

神奈川大学附属中・高等学校

小林友哉／作 大庭陽一／潤色『恋文』

富山第一高等学校

シンとヒロとリョウと愉快な仲間たち『高校生 なう』

滋賀県立水口東高等学校

うのまさたか／作『ミーティングから始めよう!』

【舞台美術賞】北海道札幌琴似工業高等学校 定時制『北極星の見つけかた』

【創作脚本賞】中原久典『うさみくんのお姉ちゃん』

【内木文英賞】神奈川大学附属中・高等学校

第61回全国高等学校演劇大会(滋賀大会) 上演・審査記録一覧

月日	上演順	ブロック	学校名	作品名	作者	創/既	わかぎ	篠原	太宰	島川	野間	片山	久保田	計	
7月30日 (木)	1	近畿	大阪府立緑風冠高等学校	太鼓	木谷茂生	既成	○	○		○			○	4	優秀
	2	九州	佐賀県立佐賀東高等学校	ママ	いやどみ☆こ～せい・佐賀東高校演劇部	創作									優良
	3	九州	大分県立大分豊府高等学校	うさみくんのお姉ちゃん	中原久典	創作	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	4	関東(南)	千葉県立松戸高等学校	CRANES	黒瀬貴之	既成		○		○		○		3	優良
	5	中國	鳥取県立米子高等学校	学習図鑑 見たことのない小さな海の僕の必需品	高泉淳子／作、 米子高校演劇部／潤色	既成									優良
7月31日 (金)	6	北海道	北海道札幌琴似工業高等学校 定時制	北極星の見つけかた	鷺頭 環	既成	○		○		○	○	○	5	優秀
	7	東北	福島県立いわき総合高等学校	ちいさなセカイ	原案: いわき総合高校演劇部／構成・脚本: 斎藤夏菜子	創作		○						1	優良
	8	四国	香川県立丸亀高等学校	用務員コンドウタケシ	豊嶋了子と丸高演劇部	創作	○		○		○	○		4	優秀
	9	関東(北)	長野県松川高等学校	べいべー	青山一也	既成				○				1	優良
	10	関東(北)	神奈川大学附属中・高等学校	恋文	小林友哉／作・ 大庭陽一／潤色	既成		○		○		○		3	優良
8月1日 (土)	11	中部	富山第一高等学校	高校生 なう	シンとヒロとリョウと 愉快な仲間たち	創作									優良
	12	開催県	滋賀県立水口東高等学校	ミーティングから始めよう!	うのまさたか	創作									優良

61回目のスタート

壇 良一

第61回全国高等学校演劇大会（第39回全国高等学校総合文化祭演劇部門）は、延べ4,700名の方々を全国から彦根市に迎え、大きなトラブルもなく無事閉幕することができました。北は北海道、南は沖縄県まで予想を上回る方々にご来場いただき、活気あふれる大会となりました。また、顧問研修会にも170名を越える方々にご参加いただき、大会を大いに盛り上げていただきました。参加・ご来場いただいた方々に心から御礼申し上げます。

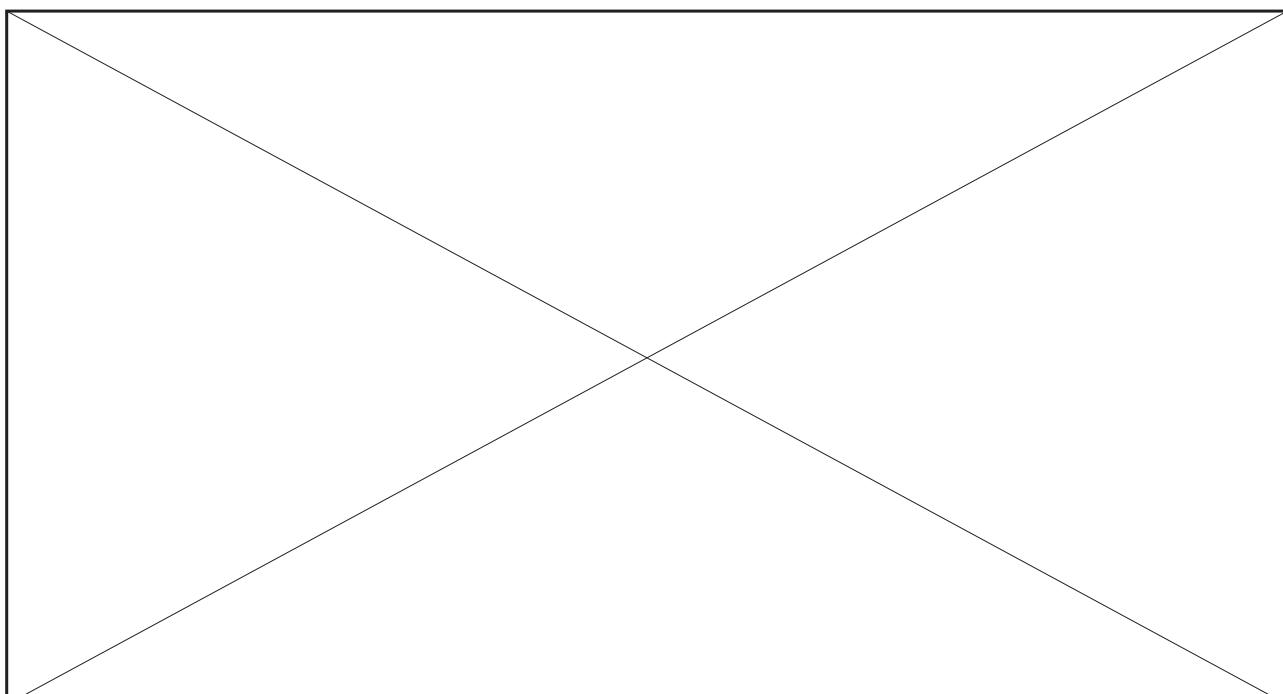
滋賀大会へ向けての準備は、富山県で開催された第58回大会で四県引継会議にオブザーバーとして参加させていただいたところからスタートしました。そのときには、何をどこから始めれば良いのかさえわからぬ状態で気ばかりが焦る状態でした。第59回の長崎大会ではあらゆる所を視察させていただくとともに、綿密に準備された資料をいただき事前準備から非常に参考になりました。60回大会の茨城県には、生徒・顧問合わせて約60名で視察させていただきました。大会運営で多忙な中にもかかわらず、最大限の便宜を図っていただき、各係の先生方や生徒さん達に具体的な運営について、たくさんのこと教えていただくことができました。また大会中に上映された60回記念ビデオを見て、先輩たちがつないでこられたバトンを引き継ぐことの重大さにプレッシャーを感じながらも、滋賀県で61回目の新たなスタートをきくことができる光栄に感じました。そして、このときの視察団の生徒および教員が、中心となって滋賀大会の運営を担ってくれることになりました。

振り返ってみると、本当にたくさんの方々のご支援とご協力をいただきました。特に先催県の先生方に様々なことを教えていただくとともに、常に勇気づけていただきました。全国高演協事務局の先生方はじめ全国の先生方には大会最終日までいろいろと教えていただくことばかりでした。近畿ブロックの先生方には運営にも携わっていただきました。出場校の皆様はもちろん、観客の皆様にも助けていただきました。大過なく幕を下ろすことができたのもみなさまのおかげです。ありがとうございました。

人も物も時間も足りない尽しの大会運営でしたが、運営にあたった生徒達は日を追う毎に生き生きと動いてくれました。これが、芝居を通して生まれる演劇部の力、61回を数える全国大会の伝統の力なのだと感じることができました。この素晴らしい力と伝統を来年以降にも伝えることができていれば幸せです。

最後に来年の広島大会の大成功を祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。滋賀大会に関わっていただいた皆様、今一度感謝申し上げます。ありがとうございました。

（第39回全国高等学校総合文化祭演劇部門 部会代表）



「大切な時間」

高野 友靖

まず初めに、今回滋賀県での全国高等学校総合文化祭開催にあたり、全国高演協、ひこね市文化プラザスタッフ様、先生方や生徒実行委員の皆さんなど、日本中のたくさんの方々に支えていただき、無事大成功に終わることが出来たことを大変嬉しく思います。本当にありがとうございました。

私自身も演劇部門生徒実行委員長として、出場校の皆さんをはじめ、大会運営に関わってくださったスタッフの皆様、また日本各地からお越しいただいた高校演劇を愛する方々など非常にたくさんの方とお話をさせていただきました。そのひとつひとつが私にとって刺激的であり魅力的な話で、その場にいられることがとても幸せでした。

この大会の運営をしていくということは多くの時間をかけ準備をしなければなりません。『総合文化祭』という年に一度だけの大きなお祭りを成功させるためには大変な苦労があります。朝早くから夜遅くまでの会議や大会の準備、さまざまなことを全員で協力してやってきました。それは、顧問の先生も生徒たちも誰一人欠けては成り立たなかったことです。

ただ、その苦労も「楽しかった」と言ってくださった上演校の皆さん、会場に来て「ありがとう」と言ってくださった皆様のおかげでとても素敵な想い出になりました。「運営に関われてよかったなあ」と滋賀の演劇部員が言っているのを耳にして本当に嬉しかったです。

大会が終わって片付けも終盤にさしかかった頃、私が上演校の皆さんのお見送りをしていた時に一人の年配の男性が私のところにゆっくりと歩いて来て、「この大会、本当に良い大会だったねえ。」と満面の笑みで言ってくださいました。私はこの時のことを一生忘れません。

たった3日間という短い時間でしたが、私にはとても大切な時間になりました。この時間を決して忘れず、これから的人生においても生涯大切にしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

(生徒実行委員会委員長 滋賀県立守山高等学校)

成長できた5日間

木村 吏那

全国大会の2日前に出会った15名、何も知らないところから始まりましたが、大会期間、熱心な講評活動をすることができました。

私たち生徒講評委員は、全国大会で上演される12作品を観て幕間に討論をします。討論では、どのように感じたのか、そのうえでどうしていこうと思ったのか、上演校は何を伝えようとしているのかなど、各校の劇について考えていきます。15人全員が同じ感想をもつわけではないので、討論していく中でより内容が深いものとなるよう努力しました。その内容を講評文にまとめる作業はとても大変でしたが、劇を観ることができなかつた人にも、作品の魅力が最大限伝えられるように講評委員全員で頑張りました。

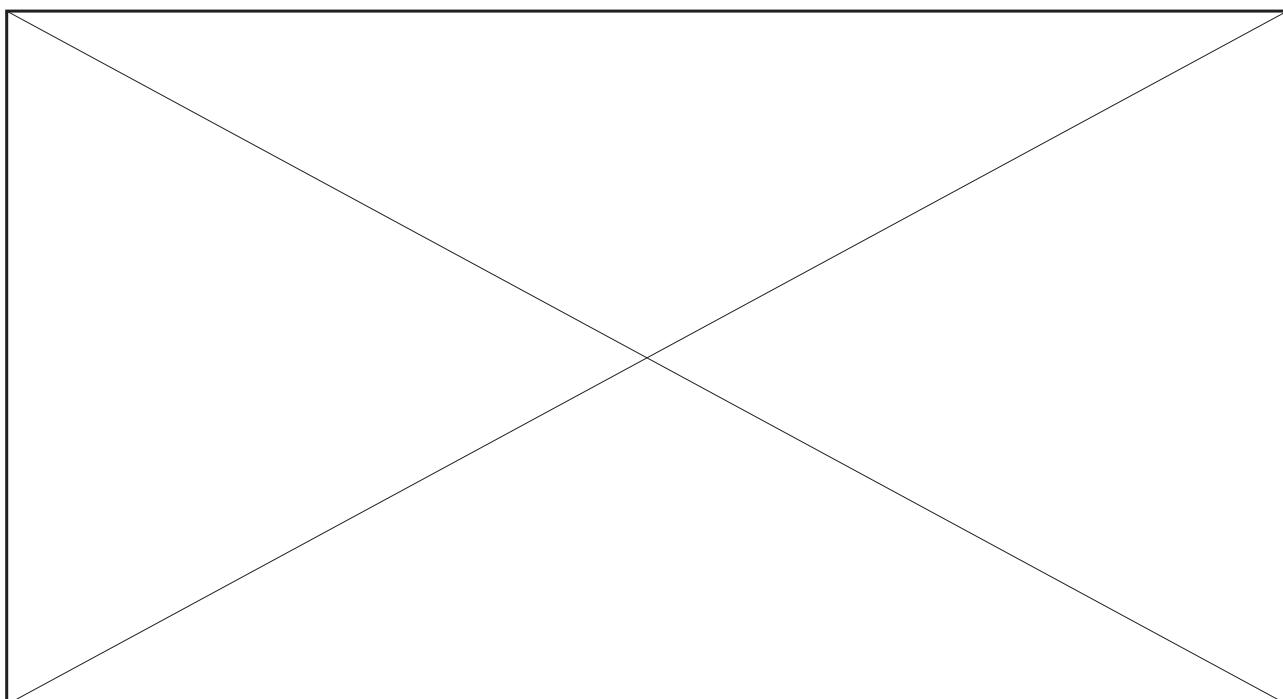
講評委員長を務めさせていただいた私は全体講評を担当しました。全体講評では、今大会で上演された全作品についてまとめ、今大会全体を通じてどうであったのかについて最終日の審査員講評の後に発表しました。他の講評委員14名がそれぞれまとめた講評文や、討論の中で出た内容をもとに全体講評を作成していました。発表の時は、その責任や舞台上で読み上げる不安や緊張でいっぱいでしたが、5日間みんなで頑張ってきた思いによって無事に終えることができました。

この5日間で講評委員としても、また人としても成長することができたように思います。演劇を好きな全国各地のみんなと交流する中で、今までとは違う視点で物事を考えることができます。自分の中に新たな視点が生まれましたし、何より本当に仲良くなることができました。また、たくさんの先生方や講評活動を見守って下さった方々、講評文を読んで下さった方々に支えられました。

私は高校1年の時から3年間、全国大会の生徒講評委員に関わせていただき、本当に幸せに思います。特に委員長として参加させていただいた今年は、印象深いものとなり、決して忘れる事のない思い出となりました。ありがとうございました。たくさんの方々との出会いに心から感謝します。

(生徒講評委員長 滋賀県立守山高等学校)

—— 会 場 の 様 子 ——



「高校生と7人の大人」



わかぎあい

自分も演劇を始めたのは高校生の時だったが、演劇部に入っていたわけではないので高校演劇の関係者に会うと別世界の人たちを見ているような気がする。先生たちと話をしていると「こんなに一生懸命やってくれる人が傍にいるって、高校生たちは幸せやろなぁ」と純粋に羨ましく思う。

今回もさすがは全国大会と実に楽しかった。いや見ている分には本当に楽しかった。しかし審査員となると、こんなに難しい大会はない。「野球とサッカーとテニスを同時に審判し、その中から一位を決めて下さい」と言われたようなものだ。

「そんなん無理やん！」と心の中では思っていたが、審査員なのだから、にっこり笑って「はい、わかりました」と応えねばならない。他の先生方はどう思っているのだろうか？私以外には皆さん簡単に見比べができるのだろうか。

と、不安に思っていたら、集まった審査員全員が「選びにくいよねえ。毎年思うんだけど可哀そудよ、この比べ方は」「いやあ今回もバラエティに富んでるね。困ったなあ」などとおっしゃってるではないか。

「あれ、皆さんもそうなんですか？」と聞くと、私を含めた7人全員が審査の基準に悩んでいることが分かりホッとした。しかし審査が難しいことに変わりはない。いや私一人悩んでいるだけなら誰か圧倒的な審査するための基準を持っている人に付いて行くことも可能だが、全員悩んでいるのであれば、ひょっとしたら優柔不断の7人組に成りかねないではないか！？

例えば、近畿代表の大坂府立緑風冠高等学校の太鼓と関東南代表の千葉県立松戸高校のCRANESはいずれも戦争を描いた作品だったが、「太鼓」は直接的に戦場に行った兵士の葛藤を。「CRANES」は広島の原爆慰靈のための千羽鶴を折る高校生の日常を描いたものだ。全然スタンスが違う。これを両方、戦争もので括っていいのか？同じ土壤で勝負するも

のとして扱っていいのか？という疑問と戦わねばならない。あれ？まだ方向性が同じ分だけ審査しやすいのか…え？あれでも比べやすい方なのか？と、こうやって後日に原稿を書いていても悩むくらいだ。

正直、ひとつひとつの作品の批評をするのは難しくはない。嘘でも演劇人の端くれなのだから思った感想を言うくらいはできる。だがこれは一位を決めるコンペティションでもあると思うと、やはり悩ましい3日間だった。審査員とは酷な仕事だ。しかし同じ悩みを抱えているせいか、7人の審査員は実際に仲良く過ごし、そのおかげでお互いに遠慮なく忌憚のない意見交換ができたし、とても勉強になった。自画自賛するなら「いいチーム」だったと思う。

作品の話に戻ろう。緑風冠高等学校の『太鼓』戦場の会話を高校生がトライする。それだけでも勇気を要する挑戦だ。一番目の上演ということで少し硬かったが、そこが初めて戦場に出向いた少年兵の心情とマッチして素直に観られた。美術の使い方や衣裳にもう一工夫ほしかったところだ。

松戸高等学校の『CRANES』は広島の話。審査員のひとり篠原久美子さんが「千葉県の高校生が、よくこの作品をやってくれた。その勇気に感謝します。」と言っていたが、感慨深い言葉だ。他県の話であろうとも人の痛みは同じという美しい心で望まれたことを評価したい。

美術や衣裳に果敢に取り組んだ作品も多かった。佐賀県立佐賀東高等学校の『ママ』は弾けんばかりのパワーで他を圧倒していた。元気すぎて動きすぎるのも愛せる一作だった。鳥取県立米子高等学校の『学習図鑑』は独自の美意識を感じる仕上がり。長野県松川高等学校の『べいべー』もユーモラスな衣裳に思わず爆笑した。

等身大の自分たちを描いて見せてくれた作品もあった。普段高校生と接点のない私には興味深いものばかりだった。滋賀県立水口東高等学校の『ミーティングから始めよう！』はアイデア一杯の楽しい芝居。今からもっと整理していくと育つ芝居だろう。富山第一高等学校はその名も『高校生なう』という直球を投げてきた。それだけに劇中の「正しいことを言っても友達にムカつかれる」という女子生徒の言葉が響いた。

神奈川大学附属中・高等学校は『恋文』喜劇の王道を目指した心意気に、コメディを書く作家として感謝したい。福島県立いわき総合高等学校の『ちいさなセカイ』は衝撃的だった。まさしく高校生の持つひとつひとつの痛みが小さなガラスのかけらのように集まった作品だった。大人が覗くのに勇気が要るような感覚が今も残っている。

さて事前に読んだ脚本の中で一番好きだったのは香川県立丸亀高等学校の『用務員コンドウタケシ』である。上演はその期待を外さないばかりか、お金をかけなくても高校生の肉体と気合でやれるんや！という吹き出しが見えてくるほど楽しませてもらった。

いい意味でメチャクチャ裏切られたのは北海道札幌琴似工業高等学校 定時制の『北極星の見つけた』だった。ちょっと無理くりなストーリーと生徒の朴訥な演技でいったいどうなることか？とハラハラさせておいて…からのエンタメ落ち。やれる事を全部楽しんだというスタイルには大拍手だった。

そして最優秀校に選ばれた大分県立大分豊府高等学校の『うさみ君のお姉ちゃん』シンプルだが、無理のない展開が一本の芝居として完成していて、文句ないコメディとして仕上がっていった。状況をリラックスして楽しめる作品として審査員全員が評価したのも自然な流れだった。悩める7人の大人を救ってくれた見事な最優秀賞獲得である。

全てが終わり帰路につく時に、私は高校演劇はフィギュアスケートのショートプログラムを見ている感覚と似ていると思った。基本的な技術をクリアした上で、構成や華やかさも採点に組み込まれる。さらっと書いたがプロが忘れがちな世界である。

今回の大会に關った彼らは演劇が人生を豊かにしてくれるツツだと感じてくれているだろうか？なんて心配もチラッとしたが、いやいやあれだけの時間を過ごしたのだから当然そう思ってくれたに違いない。というか、一人一人の顔にそう書いてあったではないかと苦笑して頭を小さく振った…高校生ってやるなあ。

(劇作家・演出家)

「いのち」と「存在」



篠原久美子

見ごたえのある三日間でした。一生の内でも十代ほど「いのち」と「自分が存在する意味」について真剣に考える時期はないかもしれません。今回もそれらを問う作品が多く見受けられました。一人で抱えれば重い問い合わせですが、演劇にはいつも「他者」がいます。「十代で演劇をやってて良かった」と、いつか高校生の皆さんのが思う時、大会の本当の幕が下りるのかもしれませんと思います。講評はできるだけ劇作家の立場から致しました。

大阪府立緑風冠高校『太鼓』

まずなによりも1956年に書かれた作品が「未来かもしれない」と感じて選んだ時代感覚の鋭さが素晴らしいと思います。また、堅いセリフを敢えてそのまま忠実に演じることで脚本の持つ無国籍性を維持された誠実さは立派でした。太鼓は世界最古の楽器と言われますが、それは心臓の鼓動に最も似ているからだそうです。少年の心臓（内臓）からの恐怖が太鼓の音に呼応して緊迫感のある舞台を創りだしていました。一点、この脚本は「殺す恐怖」を「殺される恐怖」よりも上位に置いて書かれていますので、最後、高まる恐怖のなかで少年がもう一度銃をかまえる（または撃つ）と更に恐怖が深まると思います。イラク派遣の米兵の証言に「恐怖を感じたら引き金を引く」とあるそうです。武器を持たない恐怖は我が身を守る信号ですが、武器持つ恐怖は人を殺す…その悲しさに真摯に向き合わされる上演作品でした。

佐賀県立佐賀東高校『ママ』

十代の少年が母親の延命措置の是非（生死）を決めるなどを迫られるという厳しい問題を、母親が昔書いた脚本の世界を辿ることで超えようとするという基本設定が秀逸だと思います。母にとっての子どもである「作品」と「息子」にした約束（「上演する」「一緒に月食を見る」）を共に果たそうとする試みも上手い対比だと思います。この作品は構造的には「旅物語」です。大きな問題を抱えた主人公が「母の作品」を旅することで何かを得、最初の問題にど

う向き合えるようになるかが示される構造になっているのですが、その「軸」が、「自己満足」というキーワードに囚われてぶれてしまったことが惜しかったかもしれません。自己満足から発した自己肯定というテーマは魅力的で、素敵なセリフもありましたが、最初の問題との関連性をもう少し繋げられると、更に飛躍される可能性の高い作品と思いました。

大分県立大分豊府高校『うさみくんのお姉ちゃん』

とてもよくできた脚本でした。起承転結の「起」で提示された問題が「結」においてちゃんと着地していること。伏線がすべてきれいに回収されていること。笑いも、人物にとっての必然性と他者との関係性がしっかりできているので、人物の変な動きも奇をてらったものではなく、自然な笑いになりました。高いレベルで基本に忠実で、大切にすべきことがきちんとやりとげられていましたので、人物の心の動きがまっすぐに伝わり、「アンパンマン」の楽曲の良さにも助けられて素直に心を動かされました。「神は細部に宿る」と言いますが、細かいところまで丁寧に作られた質の高い上演作品でした。

千葉県立松戸高校『CRANES』

演劇部創設以来ずっと原爆を題材にした作品だけを作り続けてきた広島・舟入高校演劇部さんが実話に基づいて書いた作品ですね。作品選びの段階で、大きな葛藤を抱えられたことだと思いますが、それを超えて、丁寧で繊細な上演にして下さいました。特に、せりふを言いながらも鶴を折る手がほとんど休まなかったことは見事でした。作中人物の目的に誠実な演技です。拝見しながら、作中で被爆された「お祖母ちゃん」から「孫」へ、舟入高校さんから松戸高校さんへと思いかが繋がって、原爆の芝居しかしないというひとつの学校の「特別」な決意が、「普遍」となって羽ばたいていく過程を見せていただいたようで、涙がこぼれました。ありがとうございました。

鳥取県立米子高校『学習図鑑』

80年代の作品を高いセンスで舞台化して下さいました。この作品は、母の喪失から「ガレージ」という子宮に籠った少年が胎内進化を遂げながら再び生まれて外の世界に出ていくまでの物語と言っていいかと思います。「波の音」や「へその緒」といった

シンボリックな仕掛けの多い言葉をかなり工夫されて舞台表現にしていましたと思います。脚本が詩的で、その言葉の持つ力が大きな比重を占める作品ですので、演じ手が言葉の域に到達しきれていないと思われる部分も見受けられましたが、その背伸びがチャレンジングでした。会話の部分では、やり取りが軽妙で、面白く見せていただきました。スタッフ・演者共にレベルの高い上演でした。

北海道札幌琴似工業高校定時制『北極星の見つけかた』 いい演劇や俳優とは何なのかと考えさせられた魅力的な舞台でした。演者の生徒さん達が「演じている」というより「そこで生きている」と感じました。脚本は「出会うはずのない人間同士が出会って影響を与え合う」という基本構造の作品ですが、「バラバラのラジオの部品を繋げる」とこと、「バラバラの星を繋げて北斗七星にする」ことが上手クリンクしていて、よく練られた脚本だと思います。また、ラジオも星も正しく繋げないと音も聞こえず、旅の目当ての「北極星」も見つからないということが、7人の作中人物たちの関係性において、「ちゃんとつながらないとホントの声が聞こえない」ことに收れんされていることが見事でした。いつの間にか一人の観客として、たくさん笑ってたくさん泣いていました。

福島県立いわき総合高校『ちいさなセカイ』

十代の若者たちのほとんどは、学校と家庭という「ちいさなセカイ」で生きていて、そこでは微妙なものから深刻なものまでいじめや仲間外れや気遣いや苛立ちや空回りがあり、そんなことは取るに足らないと思おうとしても、その「ちいささ」から抜け出せない。こうした十代ならではの焦燥感を、演劇的工夫を凝らし、同時多発的に、高いレベルで表現しようと試みられたチャレンジングな作品でした。また、その小さな世界の同郷（立ち入り禁止区域であろう町）の友人との距離が空いてしまったと感じた瞬間に、突然、小さな世界の疎外感が大きな世界の問題につながるダイナミズムには胸が痛くなる切なさがありました。それぞれの抱える問題（素材）が等身大でリアルなだけに、表現方法としての「演劇的な手数の多さ」が素材と「かい離」しているように感じられたことが惜しまれましたが、全体的に

はレベルの高い上演作品でした。

香川県立丸亀高校『用務員コンドウタケシ』

とにかく楽しく拝見できました。この作品は、応援団の引き継ぎ式でされる団長発表を引き延ばすためにした用務員さんの話題から、「人を応援する」ということの意味を探していくというシンプルな筋に沿って話が進むため、ストレスなく楽しむことができました。細かく言えば、「引き延ばすことによって女性は団長になれないという決定が覆るのか?」という論理的な問題や、ディスカッション劇の構造にも関らず論点がズレていくなど粗さもあるのですが、人物が魅力的で、運び方に楽しさがありました。演技では、「ずっと暑いという身体」をキープし続けた演者の生徒さん達は立派でした。圧巻はラストの応援です。迫力のある本格的な応援で、その練習量にも思いを馳せられ、心躍る応援でした。

長野県松川高校『べいべー』

この作品は「もしも子どもが親を選べたら」という発想を起点に、生まれたばかりの赤ちゃん達が新生児室で自分の家庭と今後の人生について語り合うというユニークな枠組みのディスカッション芝居ですが、スタッフ、出演者共に力量の高い上演でした。へその緒と卵を思わせる舞台装置、新生児室のベッド、ステンドグラスの子宮の絵、効果音など随所に工夫があり、赤ちゃん役の4人の演技も見ごたえがありました。この脚本の特徴は、設定の面白さの半面、家族に起こりがちな「問題の典型」を人物に「役割」として与えているため、ディスカッションの過程でも結末でも典型を出ることがなく、ハッさせられるような独自の視点がないことにあります。既成脚本の場合、脚本の特徴（長所・短所）を見抜き、演出でカバーするといった意識も持たれると、実力のある演劇部ですので、更に飛躍されると思います。

神奈川大学附属中・高校『恋文』

「ラブレターの送り主を探す」という、十代のモテない男子にとっては切実な目的を果たそうとするワン・シチュエーションで、一時間、楽しませてくださった実力には並々ならないものを感じました。脚本としてはミステリー（謎を追う）構造の作品ですが、設定に「7月いっぱい転校する」というタイムリミットを設けたことや、勘違いを上手く使ったコメディとして、特に前半の運びが上手いと感じ

ました。ブラッシュアップのポイントは5年前の事故のエピソードでしょうか。やや唐突で、ラブレターの送り主を探すことにうまく繋がっていないことが惜しました。大きな事故よりもむしろ、昂と沢乃の親友同士の微妙なエピソードを発展させた方が自然で深い作品になる可能性が高いと思います。とはいえ、恋の初々しさや切なさが伝わる好感の持てる舞台でした。

富山第一高校『高校生なう』

この作品は何よりも、自分たちが今現在、直面しているSNSを含むコミュニケーションの問題に、正面から向き合った真摯さが素晴らしいと思います。脚本では設定の巧みさが光っていました。DVDの紛失で明日までに作り直さなければならないという放送部の切羽詰まった状況、女子テニス部が来る必然性、最重要情報を持った男子生徒がすぐに部屋に入れない状態など、非常にうまく伏線が貼られ、それらがまた全て回収されていく上手さに驚かされました。気になったのは二点です。切羽詰まっているはずの放送部員が幕開き直ぐに作業に取り掛からなかつたことと、「この話をするときにこの人は同じ場所にいていいの?」という疑問の生じる「出ハケ」です。いずれも技術的な問題なのですが、基本設定や台詞、テーマの掘り下げなどが優れているだけに惜しいと感じました。今後に大きな期待のできる演劇部です。

滋賀県立水口東高校『ミーティングから始めよう!』

開催地の特徴を生かした温かみのある上演作品でした。フリップを駆使して始まる劇は芸術のような面白さがあり、観客に分かりやすくするための工夫が施されていて楽しく拝見できました。「困っている人がいたら助ける」少年と「人に頼ったらアカン」と言う少女の出会いを起点に、滋賀県と演劇の特徴をうまく出しながら、「出会えたことが奇跡」という視点で「壁」を超えていく構成には好感が持てます。二人の壁が中盤の関係性の中でもっと見えていくと更に良かったと思います。ネット社会で絵も音楽も小説も部屋で一人で作って世界発信できる時代、演劇だけは2500年前と同じように人と人が出会わなければできない表現活動だということを、開催県の演劇部の皆さんに作品にしていただき、大会全体を祝福していただけたような温かな気持ちになりました。ありがとうございました。 （劇作家）

舞台美術反響板



島川とおる

今大会の舞台美術ワークショップでこんな質問を生徒から受けました。アイディアが先生から出た場合はどうしたら良いか、という質問でした。私は、アイディアがどこから出ようが構わない、大切なのは一つの共通ゴールを持つ事だ、と応えました。後でよく考えると、先生が何もかも決めてしまい、生徒が舞台美術のクリエイティブな楽しみや醍醐味を経験する機会が少ないのでないのか、と少し心配になりました。舞台美術は自由な発想と遊び心が大切です。私は、若い感性と表現力を自分に取り込むのに良い機会だ、と思い今大会の審査に臨みました。以下の各校へのコメントは、舞台美術家として、観客として書いた感想です。皆様の舞台作りの反響板として参考になれば幸いです。

緑風冠高校『太鼓』

ネットで塹壕のリサーチをしただけあってスマートなセットでした。それに較べ軍服のリサーチがおろそかな感がしました。上手と下手に別次元を表すプラットフォームが有ればストーリーをもっとスムーズに伝える事が出来たと思います。バックはシロホリをブルーで染めるのではなく、大黒を使いフォーカスの効いた明かりで臨場感と恐怖心を出して欲しいと思いました。赤い信号弾を染める為のシロホリであれば、地面と兵隊に映り込む赤で充分だった気がします。

佐賀東高校『ママ』

シュール（超現実）な事柄をビジュアルで表現出来るとても面白い素材だと思います。しかし、それには病院のベッドと母親の求心力が弱い気がしました。ベッドは、舞台の中心に居続けて良いのではな

いか。シューレアリズムは、現実であって現実でないもの、現実でなくて現実であるもの、丁度我々が見る夢のような物です。シューレアリズムの画像検索をすると色々と面白いイメージが出て来ます。大いに参考にして下さい。レベル（プラットフォーム）全体の面白いフォルムが欲しかったです。

大分豊府高校『うさみくんのお姉ちゃん』

教室が斜めに振ってあるのはとても有効的です。映画のカメラアングルの様に臨場感が増し、舞台の中の出来事が手に取る様に感じました。しかし、プロセニアム全体のコンポジション（構図）の観点から見ると教室の壁と空色に染まったホリゾントが横真二つに別れてしまいました。蛍光灯を二本位吊れば構図のバランスが取れるのではないかと思います。

松戸高校『CRANES』

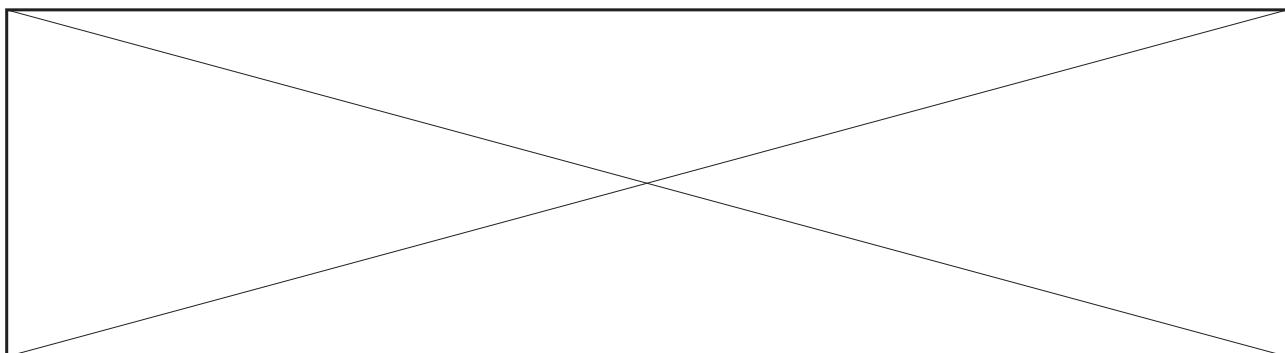
小道具で使う沢山のピンポン球が部屋の外にこぼれて、せっかくリアル感溢れる小道具による生徒会室のイメージが壊れてしまった気がしました。確かに壁なしでも芝居は出来たのでしょうか、壁なしの積極的理由を見つける事が出来ませんでした。生徒会室の奥にある黒の引割りも気になりました。少なくとも窓と出入り口付きの生徒会室の壁フレームがあれば、演技環境として役者をもっとサポート出来たのではないかと思います。大道具セットは役者の動きを規制してくれます。

米子高校『学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品』

ガレージという設定の、センターの扉と両脇の壁があまりに抽象的で分かりにくい感じがしました。これもシュールレアリズム・スタイルなのでしょうか。しかし、私たちの身の回りには抽象物はないし、私たちの見る夢のなかにも抽象物は出て来ません。抽象的表現には十分気を付けて下さい。

札幌琴似工業高校定時制『北極星の見つけかた』

舞台セットの雰囲気が、しっかりと工業高校の電



気科実習室を表し、役者をサポートしていました。そして壁にかかった電気科の幾つかの詳細なショウケースが実習室のムードをリードしていました。斜めに振った教室も臨場感を高めていました。舞台前の下手壁の終わり方も一直線ではなく工夫が見られました。バックに使われた黒の引割り幕も明かりのハレーションを拾う事もなく目立たぬ存在で良かったです。

いわき総合高校『ちいさな世界』

舞台上の「物」は、「物」以外を表さない反幻想スタイルの舞台でした。奥のシャツと旗の吊り物で映像画角を狭めたのだと思いますが、白ホリをスクリーンに使用するには大きすぎるのではないかと思われました。むしろ仮設校舎のプレハブ素材をスクリーンに使ったり、幾つかのプラットフォームに出来たら、舞台美術がもっと面白くなると思いました。

丸亀高校『用務員コンドウタケシ』

実際、部室をリサーチしたら座敷スタイルの部屋だったそうです。しかし、役者が座り込んだ時の客席からの観えにくさを考えたら、嘘でもテーブルと椅子にしたらと思いました。最後の小道具をバラして応援団シーンになる時も大げさに部室の壁（パティション）とかもバラしてしまえば、もっとユーモラスさが増すと思います。

松川高校『べいべー』

前衛的で勇気と大胆さが見て取れる大変面白い舞台美術だと思います。しかし、センターの地球らし

き吊りものは飛躍しすぎて解りづらいです。最後に地球形のライトボックスが点灯し子宮内の胎児が見えるのであれば、最初から子宮で、最後に点灯して胎児が見える様にした方が良い気がします。最初にショッキングなセットで観客を驚かした方が効果的です。

神奈川大学附属中・高校『恋文』

上手に白っぽく様式化された学校の教室を表すパネルと下手のプラットフォームだけのセットでした。白いシルエット風に町の小さな遠見を置いたり、校舎の時計台とかを吊れば、この芝居の「環境」をもっと描いてあげられると思います。

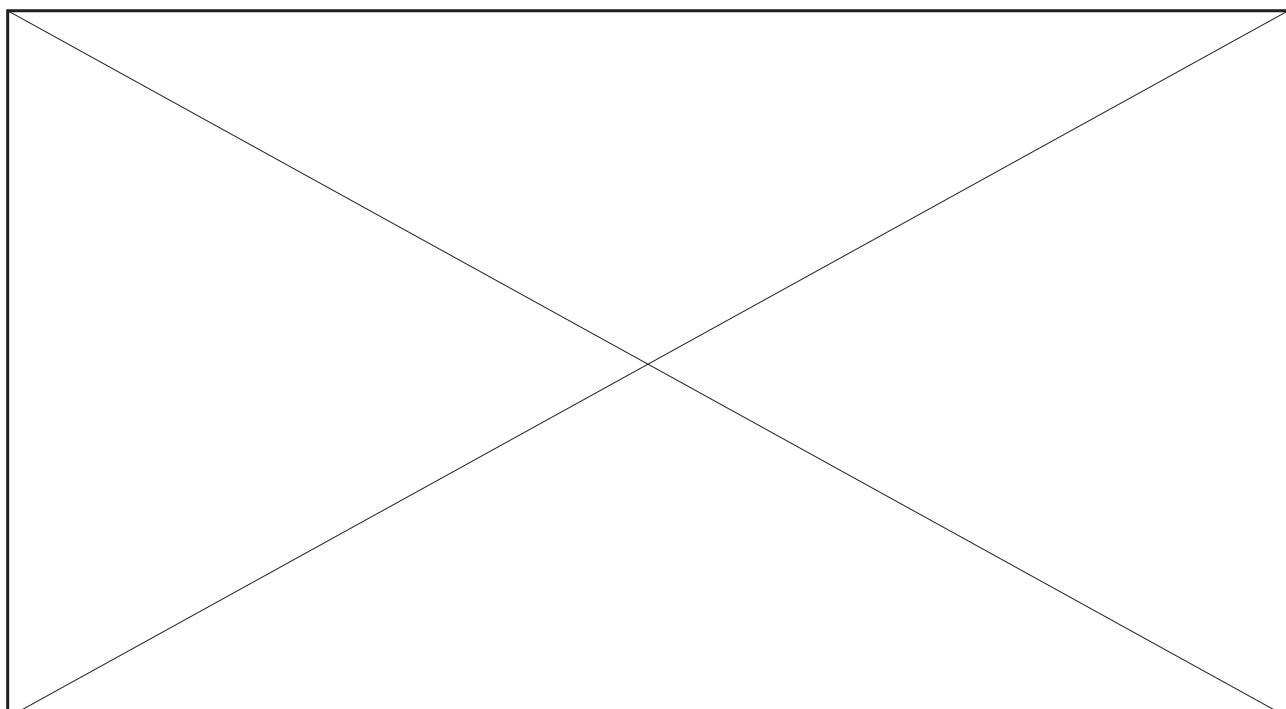
富山第一高校『高校生なう』

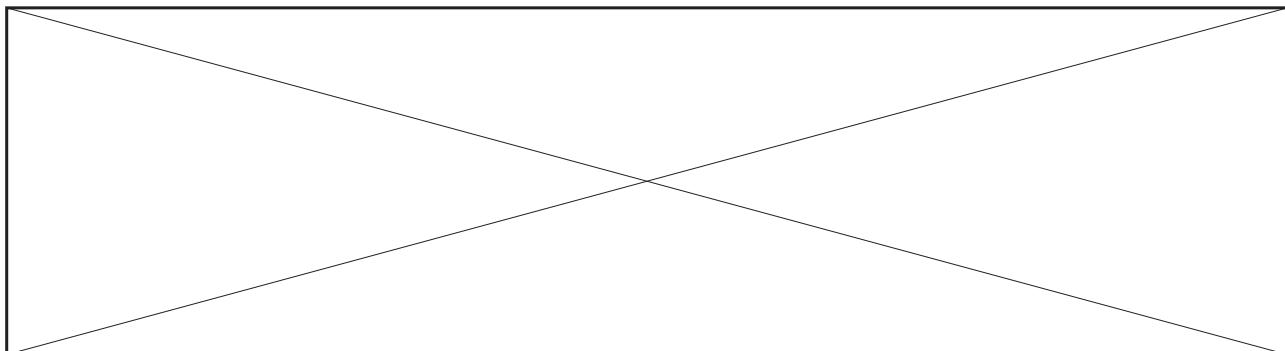
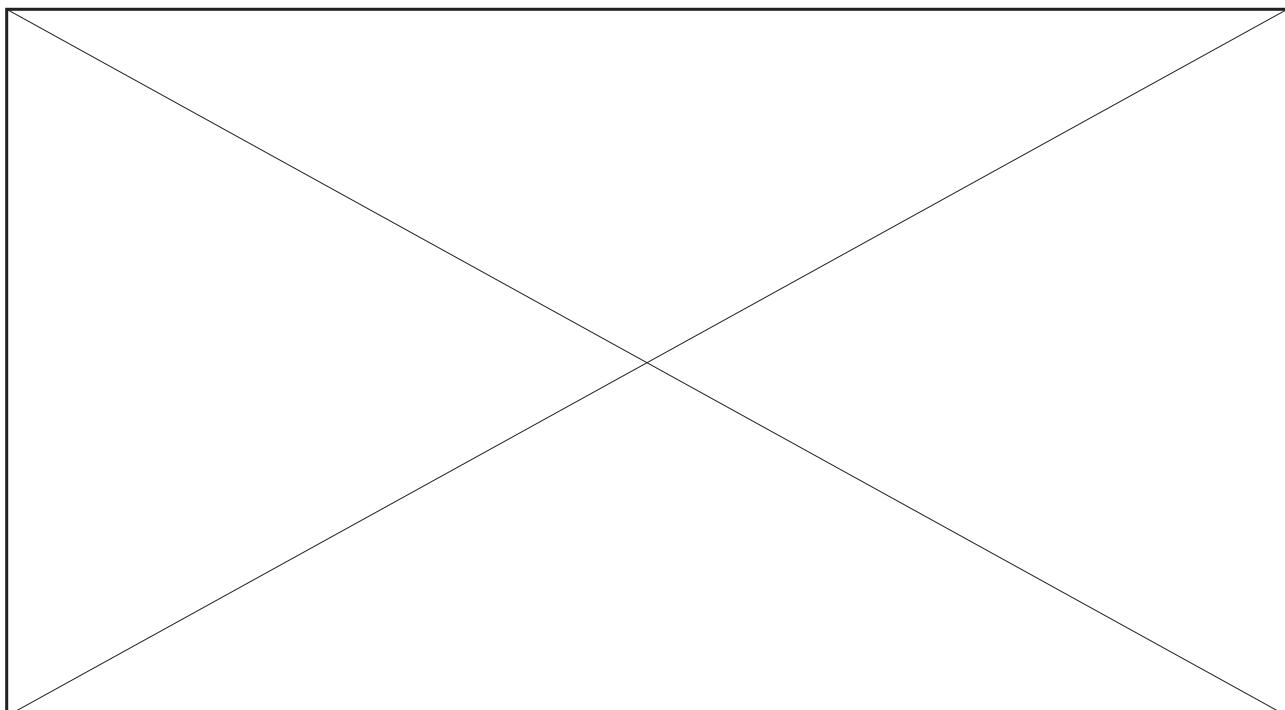
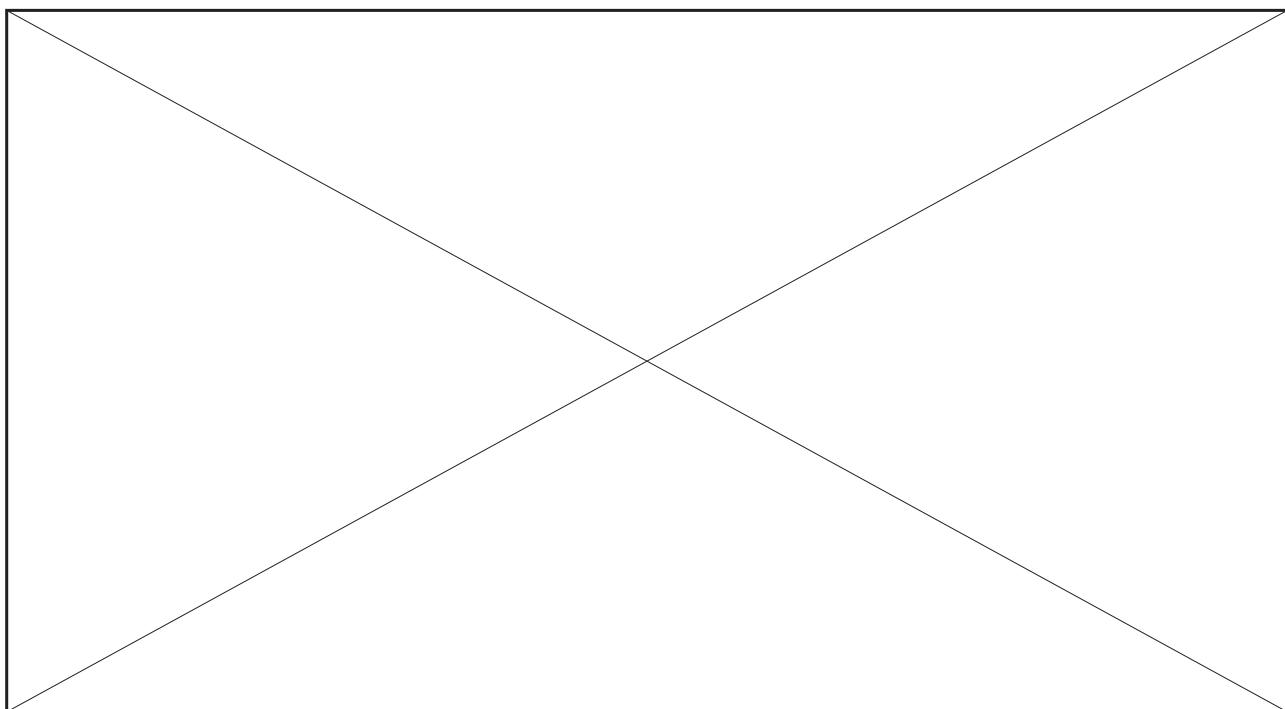
舞台美術を様式化したスケルトン・スタイルの教室の壁と黄色に染めたホリゾントがよく芝居にマッチしていました。ホリゾント前に文字、袖、黒パネルを組み合わせて、取り壊し予定の二階建ての研修センターの逆シルエットが出来れば、更に良かったと思います。

水口東高校『ミーティングから始めよう！』

上手の搬入口が下手のテントと同じ様に大道具に見えては良くないといます。バックの黒の引割りは黒の引割りとしか見えませんでした。リアルな搬入口が難しければ、引割りを開けて劇場の奥壁を見せてしまった方が良かったのではないでしょうか。ワイルダーの「わが町」スタイルです。

（日本舞台美術家協会前理事長）





第61回滋賀大会



大阪・緑風冠高等学校
「太鼓」



佐賀・佐賀東高等学校
「ママ」



鳥取・米子高等学校
「学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品」



北海道・札幌琴似工業高等学校定時制
「北極星の見つけかた」



長野・松川高等学校
「べいべー」



神奈川・神奈川大学附属中・高等学校
「恋文」

上演作品



大分・大分豊府高等学校
「うさみくんのお姉ちゃん」



千葉・松戸高等学校
「CRANES」



福島・いわき総合高等学校
「ちいさなセカイ」



香川・丸亀高等学校
「用務員コンドウタケシ」



富山・富山第一高等学校
「高校生 なう」



滋賀・水口東高等学校
「ミーティングから始めよう！」

「多種多様な作品」



太宰 久夫

今回、初めて審査員という立場で全国大会をじっくり観劇しました。多種多様な作品が彦根に来た。という印象を受けました。昨今の高校演劇のクオリティの高さはよく話題になります。全国大会をつぶさに見て、改めて実感しました。

大阪府立緑風冠高等学校の『太鼓』は、60年前に書かれた戯曲。戦争をテーマとし戦場での兵士同士の関係を通じて人の生き方に迫る作品。今を生きる高校生が戯曲の持つ重層感を、どう取り込むのか。戯曲の読み込みから立体化にかなりの労作が伴う作品。本作品にチャレンジした彼等の価値観を高く評価します。丁寧で真面目に戯曲に向き合った姿は、静かな感動を与えてくれました。ベースとなる太鼓の生音の扱いと設置場所に工夫と巧みな演出があると、舞台がより立体的になり、さらに台詞にメリハリをつけ、太鼓の鼓動とシンクロがされ、より魅力的な舞台になったでしょう。大健闘作でした。

佐賀県立佐賀東高等学校の『ママ』は、母親が脳梗塞で倒れ、家庭が窮地に立たされる。延命治療か否か。主人公、娘のコハルの葛藤が一転して母の若い頃の回想への劇中劇への展開。なかなかの大作。命という重いテーマと、母の生き様と世界観が主人公のこれから的人生観にクロスするという難解な構成を、ビビットに演じきった彼等を称讃します。台詞のキーワードの「自由」「自己満足」「価値」が本作品の主軸ですが、その詰めが甘く落とし所を模索しているうちに舞台幕。という印象は否めません。白いキューブボックスの構成舞台で空間の七変幻を期待しましたが、実はあまり生かされていませんでした。緻密な象徴的空間描写を行うことによって彼等の表現がもっと生きたに違ひありません。

大分県立大分豊府高等学校の『うさみくんのお姉ちゃん』は、トラウマを持った男子後輩に、一見強気の女子先輩がヒヨンなキッカケで出会わされ、アンパンマンのテーマソングを通じて勇気と希望を共有する。コメディタッチのスクールドラマ。冒頭のお笑いネタの女子生徒の会話から、芝居をグイグイ引っ張って行く演出力が際立ちました。演出力もさることながら出演陣の楽しくも見事な集中力と役作

りは特筆すべきものでした。一步間違うと強引で不自然そして単なる笑いに展開と思いきや、実はとても正直に芝居の良い部分を際立たせた舞台でした。とても楽しくも愛らしい舞台でした。

千葉県立松戸高等学校の『CRANES』はテーマが原爆被災者のためにおられる千羽鶴をめぐって起る葛藤。この作品への取り組みも戦後70年を鑑みる意義深いこと。戯曲が優れていることは言うまでもありません。とにかく丁寧で緻密に芝居作りが成されていました。役作りは見事。残念だったのは舞台装置、そして出演者たちの力み。見るからに芝居慣れしている彼等が何故力んだのか謎です。惜しい！

鳥取県立米子高等学校の『学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品』は、遊○機械全自動シアターの代表作の一つ。当時の典型的な小劇場作品として主人公の少年の目に移る社会、そして夫婦・親子関係を様々なアプローチから真意に迫る、メタファーな本作品に今の時代に果敢に挑戦したことを評価します。今回この作品にトライした彼等が、テーマとなる生まれ変わるということへの彼等のリアリティはどこにあったのだろうか。疑問が残りました。

北海道札幌琴似工業高等学校定時制の『北極星の見つけかた』は、ステレオタイプで人間関係を語る事は出来ない。関係性とは何かを、良くも悪くも個性的ではみ出し気味な登場人物たちの生き様を通じて描写した、正しく定時制教室ドラマ。決して上手ではない演技、稽古も十分に足りていないでしょう。しかし、無理なく自然に、むしろ楽しんで舞台にのっていた彼等に賛辞を送りたい。戯曲と出演者のマッチングの良さは見事。そこに舞台美術や照明・音響などの巧みな演出が光っていました。後味の良い舞台でした。

福島県立いわき総合高等学校の『ちいさなセカイ』は、いわき市の現状である原発事故のその後を知らないと分かり難い作品だったかもしれません。私は仕事で当地へ入っているので正直"痛い"舞台でした。同年代の人間関係を巧みに縦横そして斜めから切り込む展開は、独特の演出手法と相まって目が離せない展開でした。台詞が殆ど聞き取れなかったのが残念でした。

香川県立丸亀高等学校の『用務員コンドウタケシ』は、タイトルの用務員さんをシャドウにした手法のドラマ。なかなか巧いコンテキストの設定。応援団というヒエラルキーの象徴の様なクラブ活動での人

間関係を、今風の人間味溢れる表現に仕立てていました。この舞台から彼等の日常の芝居作りに対する基本や訓練内容など、熱く厳しく芝居を愛する姿勢を十分に推察する事ができました。芝居をもっと好きにさせてくれる舞台でした。

長野県松川高等学校の『べいべー』は、新生児の会話ドラマという一見、奇想天外な設定。自分に向き合って生きなければ将来は切り開かれない。ということでしょうか。登場人物のそれぞれのキャラクターが絶妙に光っていました。良い意味で戯曲を遊んでいた舞台。しかし、台詞の羅列に聞こえる会話も多く、脚本、演出面でより緻密な配慮が必要である事は否めません。

神奈川大学附属中・高等学校の『恋文』は、ジェットコースターコメディ。とても高校生らしい脚本・構成。登場人物の全てに明確な個性とバックグラウンドがあり、単なるテンションが高いだけのものではありませんでした。場面転換が多く、スピード感、リズム感に溢れる舞台。残念な事は本作品に合った空間ではなかったため、タイミングが思う様にならなかった事。そして緻密な演出と自然な演技に欠けることです。楽しい舞台でした。

富山第一高等学校の『高校生 なう』は、今の生活の必需品ともなっているSNSによるコミュニケーションの問題。トピックスは時流の中で生きる高校生のリアルな状況。但しSNSによるコミュニケーションの男女の違いを異なるクラブ活動に当てはめた絶妙な描写。それぞれ屈託無く表現していた点が良かった。若干、説明台詞が多いこと、映像の出し方や影MCの使い方など、演出の基本に難がありました。また同一空間に人が次々に溜まっていく状態が舞台上で起こってしまう構成に問題がありました。TVのようにカット割りが出来ないのが舞台。テーマは秀逸、さらなる進化に期待します。

滋賀県立水口東高等学校の『ミーティングから始めよう！』は、演劇部の公演後が始まり。というオーソドックスなテーマをコミカルタッチで色々な人間模様とエピソードを織り込みながら展開。琵琶湖周航の歌を上手く使いご当地をアピールしました。軽快なリズムで出演者の皆がキャラクターを楽しんでいた点が良かったです。道具の使い方、場面転換にも工夫とテンポがあり心地良かった。テントの天井に写した映像は効果が薄かったのが残念でした。

(玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科教授)

高校演劇とは何か



野間 哲

1986年、大阪の吹田の全国大会から、29回の全国大会すべてを観劇した。そして、今回現職教員のまま、審査する側として大会に参加した。そしてあらためて思ったことは、「高校演劇って何だろう」ということだった。かつて、埼玉県立秩父農工高校が別役実氏の作品を上演したのだが、その時審査をされた別役氏自身が「自分が上演したときより、役者が達者だった」おっしゃられた。いわゆるスーパー高校生の作品を絶賛されたのである。高校生が高校生を演じる、いわゆる等身大の作品も高校演劇なのだろうが、プロ顔負けの作品が登場するのも高校演劇なのだ。優劣をつけようもないことは論を待たないが、「芸術作品」にプロもアマもないという観点からすれば、最近は後者が減ってきたように実感している。

さて、今回はどんな作品が登場したのだろうか。大会第1日目TOPは**大阪府立緑風冠高校の『太鼓』**だった。全国大会TOPで最優秀賞を受賞したのは、この30年では98年の鳥取大会の池田高校（九州）だけだったと思う。それぐらいTOP上演は色々な点において、難しい（小生の部も全国では2回TOP上演をしている）。しかし、こうしたリスクを吹き飛ばすほどの素晴らしい上演だった。戦場の最前線で生死をかけて戦う兵士の心の微妙な変化が、回想と太鼓の音を使いながら、実に見事に描かれていた。奇しくも私の生まれた、昭和31年の作品が現代によみがえったのである。2番目が**佐賀県立佐賀東高校『ママ』**である。コハルの葛藤、看護師のギュッ、ママに添い寝のシーンに感動した。「あんたが決めたことはママが決めたことだから」いい台詞だねえ。一方で、少しやりたいことを盛り込み過ぎた？私も群衆劇を専門にやるので、よく陥るのだが、皆に台詞を言わせようとするあまり、台詞を振り分け過ぎた。語りの中心人物を3～4人に絞るとうまくいく。劇中劇に笑いを盛り込み過ぎで、身体表現やテンポでみせていく方法がこのお芝居には合わないと感じた。3番目は**大分県立大分豊府高校の『うさみくんのお姉ちゃん』**。強い姉、しいたげられてる弟、そ

して保健室登校の祐介。この3人を柱にした本づくりが絶妙だった。もちろんあかね役の幸さんの演技力も最高だった。最優秀賞受賞にもちらん私も1票を投じたが、どうしても「アンパンマンのテーマ」を歌ってみんなで励ますくだりが納得いかなかった。アンパンは国民的キャラクターではあるが、なぜアンパンマン？！というのが最後まで残った。4番目は千葉県立松戸高校の『CRANES』。この作品は関東勢として、ブロック大会で観劇した。ズバリ、関東大会のクオリティはいずこへ？終始音響が大き過ぎたことや、台詞が本当に聞きづらかった。一体何があったのか。大会初日最後を飾ったのは、鳥取県立米子高校『学習図鑑』。全自动シアターの看板劇。元の演出は全く踏まえておらず、頑張ったねという感じ。ガレージの中＝母胎という設定を上手に使っていた。既成台本では、元を参考に見事にまねて製作される場合が多いが、自分たちのオリジナリティを生かした秀作だった。

第2日目、TOPを飾った、北海道札幌琴似工業高校定時制『北極星の見つけかた』は定時制高校が抱える様々な内容に対し、生徒個々人がそれぞれに向き合って、解決したいと考えており、そこから生まれる友情は観客の胸を打った。ヒロ君のくれたシートで、ラジオがつながり、皆がつながるとした、作品構成がよかった。2番目の福島県立いわき総合高等学校『ちいさなセカイ』は、映像を駆使した、オムニバス形式の、いわゆる演劇の定番に捉われない、舞台空間を上手に使ったオリジナル性に富んだ作品だった。なまりのせいか、発声のせいか、台詞が今ひとつ聞き取りにくかった点と、色が画一化されたポロシャツが若干もったいなかった。3番目は香川県立丸亀高等学校『用務員コンドウタケシ』は、実際には登場しないコンドウタケシを連想させながら、応援団の日常を上手に描いた。秀作なのだが、どうしても最後の応援風景を見せるための展開に思えてしまい、ノスタルジックで、ドラマとしての葛藤が希薄に感じた。幕開きの子犬のワルツは意図があったのかな。4番目は長野県松川高等学校『べいべー』。2年連続の全国出場。お見事、そしてお疲れ様。赤ん坊の声なき声を言葉にする発想はおもしろいのだが、赤ん坊には親を選ぶ権利はなく、様々な状況で受け入れていくしかないという悲劇？を前向きに捉えて行こうというお芝居。作者の青山先生はよく存

じ上げているので、あえて書くと、発想はユニークだが、芝居の持つ行き方に無理がある作品だったかなと。個々の役者の力量が高かっただけに、ぜひ次回はオリジナル作品に挑戦してもらいたい。5番目は神奈川大学附属中・高等学校『恋文』。音響ミスは痛かったが、内容的に恋の行方のみならず、主人公の過去との絡みが上手に描かれていた。会場の人気投票なら、きっと上位入賞でしょう。美術はリアルにならなくて正解。ジェットコースターのような演出。すれ違いの悲劇がドタバタになってしまった。北関東では、なかなか選ばれないだろうシュチュエーションコメディでした。

大会3日目。TOPは富山第一高等学校『高校生なう』。富山の全国大会でお世話になった中易先生がコーチだったから言うのではなく、区切られた空間の使い方が絶妙だった。スケルトンスタイルで、フレーミング、キャスター付きパーテーション、そして照明の切り替えなどが本当によかった。ネット社会を背景に高校生のネット事情あるあるを放送部のNコンを絡めながら上手に描いた。あとは構成舞台をどう使いきるか、出はけの整理、テレビのカット割手法など、詰める点は多々あった。大トリ、滋賀県立水口東高等学校『ミーティングから始めよう！』。とにかく「琵琶湖周航の歌」に、もううっとり。絆創膏をめぐる想い出話と言ってしまえば、それだけだが、歌のイメージそのままに、ほほえましく、ある種懐かしく観劇した。ただ、「これが描きたいから書く」ということよりも、創作芝居にありがちな無理な意味づけ、展開がなされていたように思った。必然性を持たせてプロットづくりをされてはどうか。

高校演劇とは百花繚乱、様々な題材、モチーフがあり、表現スタイルも様々で、縛りがないものだと思う。しかしながら、今年も「高校生が高校生を演じる芝居」が多くを占めた。私は高校生だからこそ、逆に高校生以外の人間を演じてもらいたいという思いがある。高校生をテーマにしたお芝居を否定はしていない。しかしながら、しかしながら筆を置く。
(神奈川県立大船高等学校 現職顧問。全国高等学校演劇協議会理事。関東高等学校演劇協議会事務局。神奈川県高等学校文化連盟演劇専門部事務局。)

第61回全国彦根大会に乾杯！ 来年は広島で待つとるけえね。



片山 稔彦

全国大会で不審者に間違えられた審査員はぼくくらいかも。初日、次の上演を待ちながら久保田先生と話していた。前に女の子二人が

立った。ぼくの顔を覗き込んで「失礼ですが、どちら様ですか？」と聞いてきた。「ここは審査員席ですから」と言わんばかり。可愛かった。ぼくは名札を高々と掲げて見せた。愉快だった。さて、61回彦根大会。高校生が創り上げる舞台は実に多様なテーマに溢れていた。にもかかわらず、15回札幌大会出場を機に、途切れることなく取り組んできた我が母校舟入高校の原爆創作劇46作品の内1本を、昨年の長野県に続いて、千葉県の高校生が上演した。しかもほぼ台本通りに。去年の舞台は都合で観られなかっただけに、とても興味深かった。全国の高校生が「ヒロシマ」を演じることには大きな意義があると思わされた大会だった。高校生諸君、人ごとじやあないよ。来年は広島じゅ。待つとるけえね。

●大阪府立緑風冠高等学校『太鼓』 現代の高校生がこんな本をやるか、と驚かされた。一番気になったのは、会場の広さと作品の世界とがうまく処理できていなかった印象を受けたこと。次に太鼓の音。太鼓の位置が花道で固定されていたのは残念。時には地の底から湧き起ころてくるような、時には空から降り注いでくるような、またある時には…。そういう太鼓の音が表現できる位置を工夫するとよかつたのになあ。今の高校生にはなかなか出せない渋いテンポ。本と向き合う誠実さを感じさせられた舞台だった。

●佐賀県立佐賀東高等学校『ママ』 テーマは安楽死でよかったの？ 安楽死問題を母子の愛と母親から自立していく少年の成長を通して描こうとした作品なのかな？ たくさんのが盛り込まれすぎていて、作品として未整理だったという印象が残ったのは残念。「ママ」というタイトルが象徴的であるだけに、ママ → 母さん → お袋と変化する母親の呼称が、少年の成長を物語るものとして明確に表現されるべきなのだろうが、ぼくには納得できなかった。装置の軸はベッドだと思ったが、処理が曖昧だった。

●大分県立大分豊府高等学校『うさみくんのお姉ちゃん』 手元にある台本には幕開きの女子高校生の会話に「違和感」とだけ書き込みをしている。あとはすっかり舞台に引き込まれて、気づいてみれば幕が下りていた。「やられた。あの不自然な言い回しも演出だったんだ」。おじさんはおおいに笑い、そし

て泣いた。すっかりアンパンマンの女の子のファンになってしまった。教室の出入り口を奥に設定して効果的に処理していたが、後ろに出入り口がある教室ってあるのかな？ そこだけが気になった。よくできた芝居だった。

●千葉県立松戸高等学校『C R A N E S』 おじさんはまたもや泣いてしまった。千葉の高校生が広島を演じたからでは、断じて、ない。一つの作品に取り組む高校生の真摯さに打たれたからだ。でも、広島と「ヒロシマ」。それがどこまで消化されたか。それは疑問だ。「しょうがないじゃん、広島じゅけえ」。この台詞は被爆70年を経て、日々四六時中無意識に「ヒロシマ」を背負わされた高校生の口から思わず漏れた言葉だ。プロが演じるのならそれでいい。でもぼくは、千葉の高校生の「ヒロシマ」を観てみたかった。

●鳥取県立米子高等学校『学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品』 セットの上を乗り越えながらの出ハケ、発想はいいけど処理がまずい。羊水の中を漂う世界を表現したいのであればフワフワ感が出せないと。ドタッと飛び降りるのはダメ。女の子は危なっかしくてハラハラさせられた。それが何度も繰り返されると、ちょっとなあと思う。それで観る方は芝居どころではなくなる。ガイコツはよくできていた。幕が下りた途端、開口一番「分からへん」と、近くの席の高校生が言っておりました。

●北海道札幌琴似工業高等学校定時制『北極星の見つけかた』 すごい。長台詞が一つもない。それなのによくぞここまで。高校生の普段の会話を積み重ねながら、ぐいぐい作品世界の中に引き込まれていた。天晴れと言うしかない。おもしろかった。ナツキが三度「また明日」と言う。続いてそれぞれ翌日の景。すぐに同じ服装の生徒たちが登場する。誰か一人ぐらい上着を引っかけるとかして着替えろよ。星座の話題が唐突に出てきたり、誕生日がさりげなく9月31日だったり、そんなことどうでもよかった。ラジオってすごいね。

●福島県立いわき総合高等学校『ちいさなセカイ』 3年に一度行われていた文化祭。3年前には震災で開催できず、震災後初、6年ぶりとなる今年の文化祭。それをめぐる話し合いを軸に時間が流れるのだが、現代高校生気質が様々に溢れかえっていて、いっこうに收拾がつかない。色分けしたTシャツ、違和感が残るだけで効果的とは思えなかった。二度映し出された6号線の映像、雰囲気は伝わるが、強引すぎる印象しか残らなかった。何よりほとんどの台詞が聞こえてこないので辛すぎた。もしかして整理された未整理？

●香川県立丸亀高等学校『用務員コンドウタケシ』 事前に読んで一番面白かったのがこの本。やはり楽しかった。そしておじさんはまたしても最後には泣いてしまっていた。学ランで動き回る団員たちが本

物の汗を光らせていた。女子はスカートで扇いでいた。これにも笑わせてもらった。和室という設定は変更した方がよい。ソックスでの演舞には無理があるし、床に座り込んでの話し合いは動きを小さくした。ラストの演舞、とかく陥りがちなとてつけた感がなく、高校生のひたむきさがよく表現されていた。これも泣いた。

●長野県松川高等学校『べいべー』 新生児室の赤ん坊たちが、親たちの知らないところでこんなことやってたとしたら、親としてはびっくり。現実にはあり得ないけど、発想は面白い。でもちょっと切なさを感じた舞台でもあった。子どもは親を選べない。そりゃあまあそうだけど。結局人は人の枠を抜けきれないのだ。きれいなセットが、芝居の中でどう生きかれているのか、疑問に思いながら観ていた。最後に光ったのはよかったです、途中でももっと変化があればよかったのに。せっかくのセットがもったいなかった。

●神奈川大学附属中・高等学校『恋文』 後半は落ち着いたが、前半はシーンが多すぎて慌しい展開。暗転が多くてなかなか芝居に入りきれない。運動会を見ているようだった。それにしてもメールされた恋文を公開して、まるで犯人探しのような展開をやっちゃダメだろう。巻き込まれた昴の気持ちはどうなのよ。かわいそうだろう。不良と絡んだ5年前を思い出して言う環の「俺、強くなれたのかなあ」。昴の「なれたよ、きっと」。この名場面にすべてのシーンをつなげていかないと。さらっと流れた感じが否めなかった。

●富山第一高等学校『高校生 なう』 「ガラケイでもいいから持てよ」と言われた高校生も、今やものすごい「なう」でしょ。そこはさらっといなされた感じ。ご都合主義。問題を表面的になぞっただけで終わってしまった印象が残った。対立葛藤の深まりがドラマを生む。スケルトンの装置は面白いのに、うまく処理し切れず、随所に「そりゃあないよ」と破綻が見えた。明らかに場のイメージを全員が共有しきれていなかったのが原因。高校生に限らず、現代の切実な問題を扱っているだけに、深まりを感じられなかつたは残念。

●滋賀県立水口東高等学校『ミーティングから始めよう!』 楽しかった。が、肝心要の、打たれるものがなかったのが残念。結局何を描きたかったのか。中途半端な印象だった。でも、台本あとがきのエピソードはドラマチックで面白かった。ここからドラマが始まるんじゃないの、と思った。結局、ドラマって、演劇って、何? 難しい。考えさせられた芝居だった。演劇は見せてなんぼの世界。何を見せるかをとことん掘り下げるところから芝居づくりは始まるらしい。言うは易し。頑張りましょう。

(広島県・中国高演協理事/劇団F団員)

思いを伝えるということ!



久保田和弘

世を挙げて「チャットブーム」なのだそうだ。スマホやインターネットなどでの会話（?文?いや、文字だ!）を見せられると、暗然たる気分になってしまう。これで本当に相手と心の琴線にまで触れ合う交流が出来るだろうかと。といえば昨今の脚本は、極めて短いセリフのやりとりで出来上がったものがほとんどである。日常でも、人はもっと真剣に思惟し、言葉にならない状況で煩悶を繰り返していないだろうか?今回審査員の間で、「いい脚本を選ぶ」ということこそ、その学校の力だ」とたびたび語り合った。演劇は人間の深奥まで入り込むに有効な総合芸術だ。作る側・演じる側の「思い」をより真剣に客にメッセージするために生きた人間を舞台で演じてみせるのだ。他愛ない日常会話を延々と続け、最後にちょっぴり尤もらしい情感を付け足しての「ナンチャッテ芝居」はもう飽きられた。奇を衒ったりキワモノで関心を引こうなんぞという芝居は底が知れている。禁忌事項を無神経に振り回すような芝居は不愉快を振りまくだけだ。活字になった脚本が世に認められた高いレベルにあるなどと思うのは錯覚だ。君よ、君自身の思いを熱く語ろう!

大阪府立緑風冠高校『太鼓』 古い脚本だが、平和日本の危機が喧伝されている今、この脚本の選択は確かな視点があった。脚本の持つ重厚さと死と隣り合わせの生の尊厳さ、不気味さ漂う透明感などをどこまで表現できるかに期待を寄せたが・・・セットに高さを取り入れ、各登場人物のアクションエリアを工夫することで無理な演技からは解放されるだろう。また太鼓の音質・テンポ・位置や照明の使用色にも疑問が残った。

佐賀県立佐賀東高校『ママ』 大勢のキャストが舞台狭しと駆けすり回って大変パワフルな舞台を展開したが、いかんせん、脚本の交通整理が不足している。リアルに演じる部分と脚本世界に遊ぶ部分との交流がスムーズとは言えず、それを何度も繰り返されいくうちに観る側の心が舞台から離れてしまう。尊厳死を前に揺れる心は、真正面から描いた方が効果的では?

大分県立大分豊府高校『うさみくんのお姉ちゃん』 脚本もそつなく書き上げられているが、実際の舞台の方が数段説得力を持つのは演出が細部にわたるまで行き届いている証拠。キャストも当て書きをしたのかと思わせるほど役を自分のものにしている。滑舌も図抜けており、平素の豊かな練習量がうかがい知れる。作者には今回の受賞をきっかけに、更に人

生の機微に踏み込むような感動作を書ける段階まで成長して欲しい。

千葉県立松戸高校『CRANES』 原爆の日に向けて千羽鶴を折ろうと集まつた女の子たち。それを個性的に描き出して「制服芝居」の難しさから救い出すには、メリハリをつけた細やかな演出が欲しい。リアルな芝居だけに、セットも丁寧な考察が欲しいところ。劇の展開上、前半が単調に流れがちだが、それを克服するため時系列から離れた潤色の工夫があつても面白かった。

鳥取県立米子高校『学習図鑑 見たことのない小さな海の巨人の僕の必需品』 創作意図を十分に咀嚼して演じているのか疑問に思う点が多々あった。こうした不条理芝居の場合、演じる側の共通認識が行き亘つていないと観る側の理解を呼び起こすのは難しい。人体模型など頑張って一生懸命作った努力の跡は見えたが、セットの意味合いとそれに伴う人の動きは説得力に欠けた。

北海道札幌琴似工業高校定時制『北極星の見つけかた』 キーナンバー「7」にこと寄せて巧みに芝居を展開していくが、練習不足は否めない（年度越えでキャストが入れ替わったか？）幕開きからローテンションの会話をかなり長く引っ張ってしまったが、開幕前に誰かをベースにした調整が是非必要。演出が隅々まで行き亘っておらず、ぎこちなさが抜けきれなかったが、それでも不思議に引き込まれていく一途な訴えのパワーがあり、「演劇の魅力」を体現してみせてくれた。

福島県立いわき総合高校『ちいさなセカイ』 日常的なセカイを徹底的に描き尽すことで散見される非日常セカイの存在を浮き立たせようと試みたのだと思うが、狙いを生かしきれていなかった。（国道6号線の映像もしかり！人っ子一人いない帰還困難区域の現況だと幾人が気づいたか？）一方「繰り返し演じられるイジメ」の方が妙に印象づけられたが、それを描くのが本意でないならば、やはり折角の熱演も焦点がぼやけてしまう。斬新な発想は高く評価するのだが。

香川県立丸亀高校『用務員コンドウタケシ』 特異なタイトルで面食らったが、話は延々応援部の部長引継ぎにポイントが置かれ、たまにコンドウさんが

出てくると「コンドウタケシ氏の魅力を語る会」にまで発展してしまう。応援部の団長と性差別とシケタウドンコとあほ！うんこ！と・・・もう、こじつけが苦しいなんて言っておられない。まあ最後は夕日の中の全員演舞でめでたし、めでたし・・・楽しいお芝居でした！

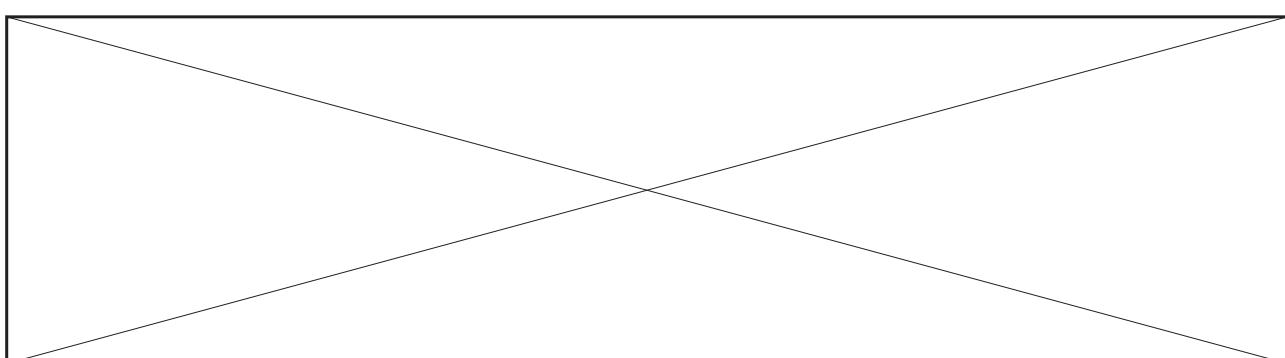
長野県松川高校『べいべー』 本来純真無垢だと思われている赤ん坊の中でも、とりわけ「新生児」の人格とそれにまつわる運命（子供は親を選べないという定め）に着目した発想は面白いが、脚本・演出共に悪ノリ過剰について行けない。結局何をメッセージしたかったのか。セットなどはそれなりの工夫もありクラブのパワーも感じられたが、そこまで終わってしまった。

神奈川大学附属中・高校『恋文』 よくある恋バナの枠組みにはめ込んだストーリーの展開だが、エネルギーが有り余ってオーバーランを繰り返した。劇画タッチのコメディー芝居と割り切ってみれば、それはそれなりに若者が思いを込めて作ったラブストーリーに見えてくる。この芝居の生命線とも言える幕開きの大切なセリフが伝わらなかつたり、キャストの動きの雑さなど注文も多いが、弾ける若さが眩しかった。

富山第一高校『高校生 なう』 登場人物間の絡みがよく書き込まれていて芝居の流れは明瞭であった。オーソドックスな作品だが、いかにして棒立ちのセリフ芝居を脱するかが課題。舞台上に必要以上の人間を載せてしまい、動きがぎこちないため芝居の焦点が散逸してしまった。でも高校生の抱えている問題を的確に捉えており、芝居作りの情熱とその問題意識に拍手！

滋賀県立水口東高校『ミーティングから始めよう！』 設定された場が「ホール裏の駐車場」にはとても見えない。引き割りを使用していることが原因だが、ホリゾントを使って、全てを屋外でやってしまってもいいのではないか。次々と様々な話題を舞台上に盛り込んでいくが、それらが次の展開に有機的に重なって行かないから芝居に深みがない。もっと刈り込んでいい。

（全国高等学校演劇協議会顧問）



第1分科会 演技

ニュートラルな体を手に入れて、真っすぐ立つ、真っすぐ歩く。

講師 わかぎゑふ

真っすぐな体を手に入る

人間の体は前のめりになってゆがんでいるが、1年ぐらいたい気をつければニュートラルポジションになる。真っすぐな体にしてバランスよく筋肉をつける。身体・姿勢を直すには鏡を見る。

声について

女の子はちょっとだけ低い声を出す。大きな声を出そうとすると高くなる人が多いので気をつける。セリフをもらったら、セリフの稽古をするのが一番。早口コトバとか腹筋ではなく 話しかける練習をする。ただしゃべるだけではなく、相手に届ける。相手に届かないものは客席には届かない。性格は、声のスピードで変わる。

立ち方

一日中立っていられる立ち方は、かかとをつけて足を45度に広げる。人間の体は木と同じで幹が一番太い状態にする。もしこの立ち方がきつかったら、あなたの体はゆがんでいる。かかとをつけて、お尻を締めて、背中を締めて、前かがみにならない。真っすぐな体、ニュートラルな体を手に入れて真っすぐに立つ。



身体の伝言ゲーム

人のスピードを手に入れたり、人の個性を手に入れたりするための稽古。学校でサークルのゲームをするのであれば、肉体訓練の代わりにひたすら歩くのをやってみる。それで、だんだん特徴づいた歩き方みたいなものを全員でやる稽古をする。そして、自分自身でない人になっていくアプローチの一つとしてやる。肉体訓練や走るよりもずっといい。何かを模倣しながら、ついでに歩くことができる。

質疑応答①「体の動きが硬いといわれるのですが・・・」

「記憶する」「喋る」「立ち位置バランスをとる」、この3つでお芝居の大半のことはできる。そのなかで、立ち位置バランスをとるためにみんな苦労する。動きがとれないと固まることがよくある。それは、稽古と経験と本の読み込みがベースになっている。体を鍛えても硬さは直らない。頭を鍛えないと体の硬い動きは直らない。

質疑応答②「声がちいさいといわれるのですが・・・」

春・夏・秋・冬の声がある。聞かせようという意識と、筋肉の使い方が大切。全部のセリフがキッチリ聞こえなくともかまわないと思う。

(文責 滋賀県立石山高等学校 北村 隆英)

第2分科会 身体表現

身体表現ワークショップ

講師 太宰 久夫

太宰先生の会場を和ます会話と明快な指導は、参加者の心をほぐし、明るく、ユニークな「身体表現」のワークショップであり、あっという間の90分であった。相手、周囲と作り上げる、工夫していく「身体表現」のトレーニングとその中でセリフとの相乗効果などを教えて頂いた。

『シェルゲーム』

1人の中身が動くのか2人1組のシェル（家）が動くのかを号令を聞き、行動する。中身がホームレスになったり、シェルが空き家になったりで盛り上がった。全体を見渡す、アピールする、「ここだよ～」「お邪魔しま～す」など声を掛け合いながらやるなどの先生からのアドバイスが入るとシェルゲームがスムーズに進み、さらに盛り上がった。自分と相手、全体とのコミュニケーションが場の空気と進行を作りあげていく。『爆発』（みんなが吹っ飛ぶ）が追加されるとさらに間の取り方、テンポが求められた。今日、会ったばかりの参加者同士が上手に活動、共演している、さすがは演劇部員達である。

『オールイエス』



なんでも「はい」と答える。あり得ないことにも「はい」と答え、アクションする。セリフとアクションを対応させるゲームである。即興の犬、鳥かごの中の鳥などでは先生は「まるでペットショップようだね」とお褒めの言葉で会場は爆笑した。2人ペアになりゲームを行い、セリフと即興のアクション、次々とペアも変わっていく。無理難題の指令にも「はい」と答え、即興の演技を通して、自分自身の判断、表現の工夫とまた相手から学ぶことが多いゲームであった。

『ティッシュ吹き上げ』

腹式呼吸のトレーニング。ティッシュを真上に吹き上げるのはなかなか難しい。そして、ティッシュを身体の指示された場所に乗せる。(アキレスけん、肩甲骨など) ティッシュを見ながら、柔軟に体を合わせていくことが求められる。

『他者との身体表現』

ペアの相手と体の一部をくっ付けながら唯一無二のポーズを作る。他のポーズと似ていると作り直す。作ったポーズはまるで芸術の様相となる。自由な発想と相手との演技の中からお互いの高さ、広がりなどさらに工夫する要素はたくさんある。4人でやるとどうなるのか?さらに絡み合うなかでどのように表現していくかを体験できた。

『追従表現』

他人の後についていく。「街中ではやらないように」(笑)。前後は合図で交代する。相手が立ち止まつたら、相手の死角に隠れるボディコントロール。フェントよりもゆっくり、かっこよくが大事である。次は、前が止まつたら「ついてこないで」とセリフを加え、2人で即興の会話を作りあげる。さらに相手が止まつたら、即興で何かを演じる。例えば、犬。「なんだ犬かあ。」などのセリフも作り上げる。動物、静止物などいろいろあったが即興のアクションと即興のセリフで大いに盛り上がり、台本通りではない表現、アプローチの学びとなつた。

(文責 近江兄弟社高等学校 武田 数馬)

第3分科会 劇 作

脚本の分析を学ぶ

講師 篠原久美子

80名余りの参加者は自分の呼ばれたい名前を書いた名札をつけ、7～8人ずつのグループで丸くなつて着席。まず篠原先生から、「この講義は大学で3～4回分、2日間はかかる内容を1時間半に凝縮するので、たいへんでしょうが、集中しフル回転でついてきてください」とお話があり和やかな雰囲気の中にも集中スタートしました。「才能は分析できる」をキーワードとして、「『才能』と『努力』の間にある『分析』」については、自分は何が出来ていないのか、何をすれば出来るようになるのか「分析」することが大切で、戯曲を書く上で必要な分析的思考をグループワークとレクチャーを通じて体感する体験型ワークショップ。

グループ名を決める 10グループが動物とフルーツを組み合わせ



てグループ名を即興で考え、キリンゴ（きりん×りんご）など

思い思いに名前を決め発表していきます。(講師先生からのコメントもあり、活気ある楽しい雰囲気となりました)。

ティピカルストーリー 資料「1. あるところに…。2. 毎日毎日…。3. ある日…。4. そして…。5.

そして(すると)…。6. ところが…。7. そして(そのおかげで・結局・最後には・その時以来)…。」にそつて、グループのメンバーが1～7の順に話をつないで即興でお話を作り(7分間で2～3話)、そのうち1つを発表し、先生から簡単なコメント。これが次のレクチャーにつながっていく。

起承転結について(レクチャー) 「起」…状況・状態・関係性の提示。「承」…変化が起こる。「転」…最大落差の変化が起こる。「結」…起の状況がどう帰結するかが見える。できあがった戯曲の問題点を論理的に分析するポイントを説明。

人物について(レクチャー) Q.「人物を作る時に必要なものは?」 A.「年齢、性格、性別、過去、人間関係…」等。その中でも特に「関係性」が重要で、演劇において関係性の中にこそドラマをはらんでいる。

作品世界作り方（レクチャー） ①「テーマ」「題材」「手法」から入る作家。（テーマに合った題材か。題材を調べ上げてテーマを見つける。1つの作品書くために70冊ぐらいの参考資料にあたると目から鱗が落ちるように書くべき視点が見えてくる。そこまで題材を調べる。）②「人物」「場所」「状況」から入る作家。（ある人物がある状況に置かれたらどうなるかという化学反応を書く。）③セミパブリックな空間とドラマを孕む空間（例、超高層ビルの最上階でエレベータが止まつたら）

台詞について 「あらゆる言葉は説明」であり、感情的な説明や論理的な説明がある。直接説明（言葉）と間接説明（身体・行動）の関係のバランスが必要である。「人を感動させるのは理屈」であり、「分かるの積み重ねが感動につながる」ということで結ばれました。 （文責 滋賀県立八日市高等学校 大久保美幸）

第4分科会 舞台美術

舞台美術について

講師 島川とおる

第4分科会では、舞台美術についての分科会が行われた。まず、分科会に出席していたそれぞれの出演校に対して、今回の舞台美術で苦労したことやこだわったところを島川先生が質問され、さらにアドバイスもされた。出演校が試行錯誤しながら舞台美術を完成させた課程や今回の舞台美術に対する思いなどを知ることができた。

舞台美術は大事な要素

幕が開いて観客が最初に目にするのが舞台装置であるため、ムードをしっかりと作ることが重要だ。色使いや形など、芝居に合ったビジュアルにしなければならない。舞台美術は芝居をリードする役割を担っている。また、舞台で大切なのは役者の演技や台詞を通してストーリーを観客に伝えることであり、舞台美術はそのサポートをしているという意識を持つことが必要である。



図面の書き方

資料（島川先生が実際に作られたデザイン）を使って平面図、立体図、断面図、透視図などの図面を書く際に必要な文房具をはじめ図面の書き方の具体的な説明。モノを効果的に作るためにには、全員が同じ情報を理解することが必要なため、正しく図面を書くことは大切である。

予算が限られている場合

安価なものなど様々な材質に挑戦することが大切だ。また、既に出来上がっているモノを使用しても立派な舞台美術は完成する。

質疑応答

Q 舞台美術を作る上で、演出家など他の役割との兼ね合いをふまえ、食い違いのないように作るにはどのようにするのが効果的であるか。

A 演出家とスタイルを一致させることは必須なので、演出スタイルを聞く必要がある。全員が理解と解釈をするため、デザインについてのプレゼンをするなどの工夫をする。完成させるゴールは同じであるということを意識して取り組むと良い。

（文責 滋賀県立八幡商業高等学校 山中 愛）

第5分科会 部活動

部活動について

講師 久保田和弘／片山 稔彦／野間 哲

最初に、3人の講師の先生方より自己紹介を兼ねてひとことずつご挨拶いただきました。

その後、会場の参加者より部活動での悩みなどの質問を出してもらい、講師の先生方にアドバイス等を答えていただきました。

Q 1／1年生のまとめ方：「新1年生の人数が多く、上級生の人数が少ない。どうまとめていったらいいか？」

A・部則をつくる（当たり前の常識のこと）。上級生で役割分担してきちんと指導。2, 3年でミーティング「悪役、励まし役を決める」。役割分担で統制が生まれる。あきらめず粘り強く。芝居を通じていろいろな役割を経験させる。

Q 2／相手を引き出すには」「エピソード（エチュード）などどうきいたら相手の話を引き出せる？

A・高校生は経験が少なく未熟、TVや本で人と接する機会を増やす、想像の世界を広げるそして練習。新入部員が多いとすごくチャンスがある。リアリティを出すためには、やる人と見る人が大切。客観的にみる人間がいる。

Q 3／部活動における人間関係、キャストとスタッフの関係：「やりたい役につけなかった人への対応」「キャストばかりにスポットが当たる」

A・強引に決めない。希望を聞いてしっかりと議論する。「この芝居で何をみてもらいたいか？」「一番表現したい、伝えたいことは？」話し合う、時間をかけることを基本にする。

「キャストができないからスタッフ」はダメ。スタッフあつての役者。スタッフのあり方を話し合う。色感覚がいい人が照明、幅広い音楽を聴く人が音響向き。キャストについてもたとえば、代役・ダブルキャスト・トライアル制など。演出家は人格者であれ。厳しさの中で物作りをする。妥協しない。その他、年に1本は創作劇をする。台本はコンペなどみんなが書いてみる。選ばれた人が責任を持って作り上げる。



おろさない。きちんとスケジュール化。文化祭や体育祭の後が狙い目、後始末は演劇部で廃品発掘など。

Q 4／レベルアップのやり方「たくさん的一年生のレベルアップ、やる気に、上達させることができるか？」

A・人数が多いと他人任せになる。1年生というくくりをしない。部署を作つて班分けをする。責任者を作り、はっきりと目的を伝える。できない人ははっきり目的を伝えてグループにする。伝統を一度作るとなかなか崩れない。

Q 5／部活と勉強の両立

A・授業中は絶対に寝ない。一つのこと熱中すると切りかえでのびる。「一芸に秀でたものはすべてに秀でる」。自分のダメ加減を思い知る。何かに打ち込んで熱中できるといい。

(文責 滋賀県立彦根西高等学校 森 喜久雄)

第6分科会 生徒講評委員会合評会 生徒講評委員の目で見た上演作品

合評会では、生徒講評委員の司会進行のもと、講評委員から講評委員会で出された各上演作品に対する討議の内容と講評が紹介された。それをもとに作品や部活動について、上演校や観客を交えて活発な質疑応答がなされた。(全体講評文から一部引用)

①【太鼓】(大阪 緑風冠高校)

「道徳や故郷を捨てなければ生きていけない戦争の怖さを感じさせ、後世のためにもこの恐ろしい記憶を風化させてはいけないということを伝えていた。主人公の恐怖心と同調するように鳴る太鼓の音と、故郷へ帰りたいという想いや生き残った人たちはどれだけ犠牲者のことを思っても結局は忘れてしまうという事実が、よりこのことを忘れてはいけないという想いを強くさせた。」テーマとして「戦争」と「平和」を考えさせる作品。「太鼓」のメッセージについてや練習をどのように行ったかなどの質疑応答があった。

②【ママ】(佐賀 佐賀東高校)

「母との別れを理解していくながらも受け入れることができない少年の葛藤に思わず自分の家族のことを思ってしまった。母の思いを息子が繋ぐ」という一つの親子の形を表した作品だった。最終的に母の死を受け入れ、自分の価値を見いだした主人公を見て、自分の家族がこのような状態になったとき、家族としてその人の想いをどう遺していくことが出来るか考えた。」登場人物について、「母親の存在」「看護婦」などをどのように考えるかの意見交換、さらに日頃の練習についての質疑応答があった。

③【うさみくんのお姉ちゃん】(大分 大分豊府高校)

「無口でいじめられているクラスメイトに、周りが手を差し伸べ、それによっていじめられている本人が少しだけ成長する姿に心を打たれた作品であった。いじめられていた人物が、大声で『嫌だ』と感情を露にするシーンは印象に残った。怖くても自分の意志を伝えることが重要だと感じた。会場全体に笑いを誘って

いた。アンパンマンとその歌、溝呂木君の変化など見所が多くあった。」台詞回しのテンポの良さや練習のときの工夫についての意見交換があった。

④【CRANES】（千葉 松戸高校）

「広島の原爆など恐ろしさは習っているから知ってはいるが、知識としてとどまっているだけであり、それで学習することに本当に意味はあったのかと考えさせられる劇であった。しかし、一度は考え方の違いから衝突した登場人物達であったが、それぞれの想いを一致させないまま千羽鶴を折り、平和を願った行事を成功させることを選ぶところを見て、想いを込める以上に、記憶を風化させないために『続ける』ことに意味があると思った。」「平和」について考えさせると同時に、「平和学習」はどうあるべきかについても講評委員会では議論になった。千葉県の高校生が広島を舞台にした劇で、広島弁（方言）についてなど舞台裏の苦労話があった。

⑤【学習図鑑】（鳥取 米子高校）

「小学校の授業風景、親子の会話など日常にもある場面だがどこか違和感があつたり、ギャグシーンだったはずなのに意味深な雰囲気を残していったりと難解なストーリーに様々な考察が飛び交った。人によって受け取り方が違うということが顕著に表れた作品であった。周りの人にこの劇の存在を伝えて違う見方を知つてもっと楽しみたいと思った。」現実だが現実ではないという不思議な世界観、見ているものに多用な世界観を与える作品であるという意見交換があった。さらに解剖シーン、出産シーン、舞台に登場するさまざまな色（青・白・赤など）の配置は何を意味するのかなどさまざまな解釈が出来る作品であった。

⑥【北極星の見つけかた】（北海道 札幌琴似工業高校定時制）

「他人のビジュアルを元にした偏見が自分の中にもあることに気付かされ、人を見た目で判断することでその人の真実が見えなくなることなどを表した作品であった。定時制の生徒が演じるからこそ、彼らが抱える重みがリアルに伝わってきた。初めは心が一つにならずバラバラだった登場人物たちの人間関係が、バラバラのラジオの部品を協力して組み立てていく過程や全日制の生徒の発言をきっかけに、繋がっていく様子がストレートに伝わってきた。」いろいろな過去を背負っている登場人物それが次第につながっていくというストーリー。定時制高校という環境の中で、練習はどのように行っているか、星をテーマにしたのは何故か、ダンスを取り入れたのは何故かなど活発な質疑応答があった。



⑦【ちいさなセカイ】（福島 いわき総合高校）

「一人一人に焦点を当てることで、教室という『ちいさなセカイ』にいる高校生たちの心の中を様々な角度から見ることのできる作品であった。Tシャツの色で教室内の人間関係が視覚的にわかる工夫がなされていた。身の回りにある狭い人間関係を表現しており、登場人物の中に自分を見つけ、共感したり恐怖を感じさせたりした。最初と最後に福島の映像を流すことで被災地から避難している方々の居場所のなさや孤独感を暗示しているのではないかと考えた。」テンポがよい、自分たちにとって大きい悩み（恋・いじめ）をとりあげ、共感できるシーンが多かったという感想があった。最初と最後の映像の真意は？などの質疑応答もあった。

⑧【用務員コンドウタケシ】（香川 丸亀高校）

「伝統は大切であるが、受け継ぐなかで時代に合わせて変化し枠に当てはめない、広い視野で守っていかなければならぬということを感じさせられる作品であった。コンドウを出さないことで、観客一人一人が想像し見えなくてもきちんと存在しているキャラクターとして描かれていた。最後の演舞で精一杯誰かを応援したり、応援してくれる人への感謝の気持ちを伝えたくなつた。」軽妙なテンポで話が進む、キャラが濃い、表情・動きがおもしろかったなどの感想があった。演舞の考え方は？練習は？などの質問もあった。

⑨【べいべー】（長野 松川高校）

「性同一性障害という最近話題となっている問題が盛り込まれており、子供は親を選ぶことができないということについて、自分が大人になったとき子供に与える影響など様々考えられる作品であった。赤ちゃん目線にすることで伝えたいメッセージが受け取りやすくなっている。セットの配色が神秘的で、ベッドの作りはあたかも乳児室にいる赤ちゃんのように見える工夫がされていた。」親は選べない、でも自分の将来は変えられるというメッセージが込められているという感想があった。また、舞台のセットの地球？精子と卵子？生きる・命というテーマを取り扱った理由は？などの質問もあった。

⑩【恋文】（神奈川 神奈川大学附属中・高校）

「どの登場人物も個性的で憎めないキャラクターを役者が巧みに演じており、会場の観客をコミカルな世界へ巻き込んでいく作品であった。個々のキャラクターを表した衣装の色と着こなしや、ポップな曲やピンクの照明も劇の明るく楽しい雰囲気作りに一役買っていた。一女子高生の、素直になれない、伝えたいけれど知られたくないといった思春期特有の感情がうまく表現されていた。」笑いの渦に巻き込んだ作品、高校生を虜にした、受け取り方の違いがこの作品の良さ、役者の声のトーンや細かい演技がすばらしかった、細かい演技が丁寧などの感想があった。キャラ作りの工夫は？などの質問があった。

⑪【高校生 なう】（富山 富山第一高校）

「便利に使っているSNSの光と影。SNSと共に存している自分たちをうつしだされているような気持ちになる。まさに高校生の"イマ"を表した劇であった。数年前までは存在しなかったSNSが、ここまで広がり、嫌な思いをすることもある。しかし、"イマ"を生きる私たちは、インターネットという名の蜘蛛の巣に引っかかりながらもSNSとうまく付き合っていかなければならない。自分のSNSとの関係を考えるきっかけとなる劇であった。」プロジェクターで表現することで、その役の顔が見えないから想像させられた、SNSの特徴をうまく表現できていたという感想があり、また仮面をかぶっているのでSNSでは本音？建前？最後は救われたの？という質問もあった。

⑫【ミーティングから始めよう！】（滋賀 水口東高校）

「勢いのある役者たちが織りなす笑いと、舞台の上に満ちる青春の鮮やかさに心を奪われ、終始客席が温かい気持ちに包まれていた。はるなと和輝が向かい合い、二人の間にある見えない壁を協力して取り払ったとき、さわやかな気持ちが会場を満たした。その二人の純朴な姿や、青春がぎゅっとつまつた演劇部の姿が相まって、先生の『出会いうことができたなら、それだけで十分奇蹟じゃないですか。』という台詞がじんわりと心に響いた。』心から楽しめた作品、テンポもよく、キャストも楽しそう、常に飽きずに観られた、出会いのキセキを思わせるシーンがたくさんあったなどの感想があった。模造紙の演出はどういう意図？物語のテーマについてなどの質問があった。

（文責 滋賀県立守山高等学校 松浦 正美）



事務局
通信

記録的暑さの中でスタートした今年の夏、第61回滋賀大会を前に、今年度第2回常任理事会・理事会が行われました。

前回の茨城大会の最終総括では4,000名を超える観客を迎えて、会場の狭さが懸念されましたが、スムーズな運営ができたこと、60回の記念大会として、多くの関係者が集まり盛況であったことが謝辞とともに述べされました。次回の広島大会は、インターハイとの兼ね合いから、宿泊施設の予約が懸念されること、会場の駐車スペースがなく道具類の搬入出の手順を考えなくてはならないこと等が課題として挙げられました。その一方で、会議日程の一部見直し（4県引継会の設定時間の変更等）、生徒講評委員会に平和研修を入れ日程を一部前倒しすること等が、新しく提案されました。一昨年の長崎では来場した方に鶴を折ってもらい平和の尊さを考えてもらう取組みがありました。広島でも、そうした取組みが行われることは意義のあることと考えます。

第1回理事会提案の確認事項のうち、「大会参加資格」について、異なる課程を持つ学校の大会参加は、活動実態に合わせて加盟母体が参加を認める方向で扱うことが確認されました。また「出場学年」については3年までとし、中等教育学校後期課程、特別支援学

校高等部も同様の扱いとなります。

昨年度発生した近畿ブロック大会における「吊物落下事故」についての事後対応としては、近畿ブロックから、吊物についての生徒対象講習会を実施し、参加を義務付けたこと等が報告されました。この点について、演出演技などについての講習は各地で盛んに行われている一方で、スタッフワークの講習については手薄であることが指摘されました。各地区においても舞台、道具等技術面での講習をぜひ取り入れていくといいと考えます。

「著作権」については、複数の地区から「ガイドライン」をめぐって、さらに議論を重ね認識を深めるべきではないかという指摘が出されました。表現における創作性は、常に議論の対象になる問題ですが、近年、アイディアやプロットの扱いについては、創作の幅を狭めない方向で取り扱う流れが定着してきていますが、まだ共通認識を十分に得ているとは言えない状況です。今後とも各都道府県の意見を聞きながら、全体としての認識を深めていきたいものです。

また、映画や舞台で人気となった「幕が上がる」への協力についての感謝が述べられました。高校演劇への関心がさらに高まる 것을期待します。

（事務局・三上 実）

2014年度 全国高等学校演劇協議会決算報告				
<一般会計>				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
基本収入	会費	2,000,000	2,148,000	1,000円×2148校分
その他の収入	活動報告広告	400,000	435,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	130,000	120,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	300,000	291,660	高文連より活動補助・旅費
	利息	450	556	三井住友銀行
繰越金	前年度より	1,727,342	1,727,342	
民間支援	支援金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	1,415,000	1,424,000	NHK・四国学院・東京フィルム・桐朋芸術
合 計		8,972,792	9,146,558	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
管理費	旅費・交通費	1,600,000	1,643,662	茨城、香川、滋賀旅費、近距離旅費等
	役員派遣費	250,000	211,200	会長、事務局長旅費
	会議費	80,000	80,000	常任理事会費用
	通信費	150,000	139,416	切手・ファクス・送料・HP維持費等
	印刷費	150,000	113,940	名簿・賞状
	消耗品費	15,000	5,939	文具、コピー・タックシール等
	事務局維持費	70,000	70,000	行動費
	記録費	15,000	15,000	上演脚本等
	雑費	20,000	16,360	差し入れ等
事業費	会誌発行	800,000	855,960	演劇創造130・131号
	ブロック連絡費	10,000	7,668	各ブロックへの振込費用
	活動報告集	900,000	871,500	活動報告
	60周年事業関連費	200,000	51,830	パンフレット等
渉外費		50,000	30,000	審査員慰労費
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院ブロック補助(25万×8)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(滋賀県)
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		1,862,792		
合 計		8,972,792	6,912,475	

2015年度 全国高等学校演劇協議会予算				
<一般会計>				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
基本収入	会費	2,148,000	2,140,000	1000円×2140校
その他の収入	活動報告広告	435,000	400,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	120,000	130,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	291,660	300,000	役員旅費・運営費
	利息	556	500	
繰越金	前年度より	1,727,342	2,234,083	前年度繰越金
民間支援		3,000,000	3,000,000	日本工学院
	協賛金	1,424,000	1,424,000	四国学院・東京フィルム・桐朋学園・NHK
合 計		9,146,558	9,628,583	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
管理費	旅費・交通費	1,643,662	1,800,000	滋賀、広島、伊達、事務局会議旅費等
	役員派遣費	211,200	250,000	役員派遣
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	139,416	150,000	切手・送料、ファクス等
	印刷費	113,940	150,000	名簿・賞状、封筒等
	消耗品費	5,939	15,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	15,000	15,000	脚本購入等
	雑費	16,360	20,000	
事業費	会誌発行	855,960	900,000	演劇創造132、133号
	ブロック連絡費	7,668	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	871,500	900,000	各都道府県活動報告集
	60周年事業関連費	51,830	0	
渉外費	渉外費	30,000	50,000	全国大会関係
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(佐島県、チラシ5万円含)
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費			2,418,583	
合 計		6,912,475	9,628,583	

<特別会計>				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	2014年度繰越金
合 計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263		
合 計		1,945,263	1,300,000	

<特別会計>				
収入の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合 計		1,945,263	1,945,263	
支出の部				
大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	645,263	645,263	
合 計		1,945,263	1,945,263	

「お知らせ」 第61回滋賀大会も大勢の観客の皆様に観劇をしていただき、盛大に終えることができました。大会に先立ち行われた全国理事会では「2014年度決算報告」と「2015年度予算」が可決承認され、顧問総会においても報告がなされました。

私たちの演劇活動は、多くの協賛団体様からの支援をいただいていることで成り立っています。日頃から高校演劇に理解を示していただき、援助をしてくださっている特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学、東京フィルムセンター映画・俳優専門学校などの各支援団体様に心から感謝を申しあげます。